特218
770

國民叢書

〔61〕

國文法の知識

小林鶯里著

文藝社

始

特218
770

國民叢書

〔61〕

國文法の知識

小林鶯里著

文藝社の綱領

文學報國を基礎とし專に響利のみをす期をとこんせ献貢に化文文ゆせと的目

國民叢書刊行の趣旨

最近讀書界の傾向を見るに、徒らに奇らしい事を好み、新しき事を求め、皮相な自然主義にかぶれ、危險な外來思想を歡迎する爲めに、從つて我國獨特の賢實な思想は動搖し、すべてが物質的となつた。此儘で押て行つたなら實に國家の將來に憂ふべきものがあらうと思ふ。私は此點に鑑み、私の綱領とする文章報國を以て進み、有ゆる知識を吸收するに急なる學生諸君、若くは一家、社會、國家の務めに忙しい方々に對し、極めて僅かなる時間に於て、趣味と實益とを供給し、廣き範圍の讀者に必樞の知識を注入し、聊かにても文敎の實を擧げ、國民常識の源泉にしやうとの考から本叢書の刊行を企てたのである。この計畫は世間一般の

一時的なものと異り、私は永遠の事業として微力を本叢書に傾注し、極めて淺薄なる自己の實驗に鞭ち、犧牲と奮鬪とを續けて本叢書の使命を完成しやうと思ふ。彼の獨逸のレクラム叢書は有名なものである、彼は古典的價値ある書を簡易な形式に依つて刊行するのであるが、本叢書は現代百般の科目に就て獨自の編著に依つて逐次刊行するのである。滿天下の諸賢は私の微意を諒とせられ、進んで本叢書の達成に援助せらるゝならば私の幸とするところである。

小林鶯里

はしがき

本書は初學者の爲に國文法の大意を知らしめんとしたものである。從つて、成るべく簡易ならしめん爲に多くの表を挿入し、且用語をも平易ならしめ、以つて一讀直ちに國文法の要領を把握せしめんと期したものである。故に本書を讀了せられたならば、國文法の既念を會得せられる事と信ずる。

一體國文法の必要に就いては今更改々を要しないが、吾人は吾人の生命として國語を愛し、國文に無限の懷しみを持つ。從つて之等國語・國文の中から共通の現象を抽出し、更に之を組織化した文法にも同樣に愛着を持つべき筈である。凡そ事物を完全に理解せん爲には、其事物の理論法則を知るべきである。國語・國文を完全に理解し、更に之を妙用せんとするならば、同樣に言語の法則たる文法を知るべきである。本書編纂の意も此處に存する。

著者　しるす

國文法の知識

（目次）

總論

單語篇

第一章 名詞及數詞……九
第二章 代名詞……一三
第三章 動詞（其一）……一七
第四章 動詞（其二）……二五
第五章 動詞（其三）……三八
第六章 形容詞（其一）……四七
第七章 形容詞（其二）……五五
第八章 副詞……六六
第九章 接續詞……七四
第十章 感動詞……七九
第十一章 助動詞（其一）……八二
第十二章 助動詞（其二）……九一
第十三章 助動詞（其三）……九八
第十四章 助詞……一〇三

文章篇

第一章 文の成分……一一三
第二章 文の成分の位置及省略……一二七
第三章 句……一二九
第四章 文の構成上の分類及性質上の分類……一三一

國文法の知識

小林鶯里著

總論

我々人類が集合して社會を組織して行く上に於て、相互の思想感情を表示して、其思想なり感情なりを交換する事は、社會生活上最も肝要な事である。併して其思想交換の手段としては、最も未開時代に於ては、身振が其樞要なものであつたが、其身振の中にも色々の形式があつて、或は手足を動かす事に依つて意志發表に代へる最も幼稚のものから、更に手指を以つて色々な形型を示すより高等なものが存在して居た。併し今日の文明諸國に於ては、身振は只言語の補助的意味で使用せられてゐるが、之に反し、野蠻未開の國では今日猶身振が言語中の樞要な地位を占めて居る。

然らば、今日文明諸國で使用されて居る意志表示の方法は何かと謂ふに、謂ふ迄もなく言語で

ある。然らば言語とは何？先づ之を定義する必要があるが、之を一口に謂へば、言語とは音聲を材料として之に思想を結合した一種の符號である。從つて音聲ばかりあつて、思想の之に結合しない言語が假にあるとすれば、夫は鳥の聲、風の音等に等しいもので、無意味な音を徒らに羅列したもので決して言語とは謂はれない。更に之と反對に、思想のみを持つた言語が假にあるとしても、之を聲音で發表しないものは又言語とは謂はれない。之を要約すれば、言語とは思想と聲音とを同時に包含したものであると謂ふ可きである。

乍併、言語に就いて注意せねばならぬ事は、言語も話者聽者の發音機官、聽覺機官の相違に因つて、追々と微々たるものではあるが相違を生じ、延いて言語の變化が漸層的に將來される事である。一例を擧げて說明すれば、奈良時代に專ら行はれ居た言語と、今日我々の間に用ゐられて居る言語との間には大きな徑庭があつて、今日の我々に取つては、當時の言語は注釋なしでは理解出來ない。之に依つて見るも、言語が時代と共に漸層的に變化する事は明瞭な事實である。

次に述べたいのは文字の事であるが、元來文字と言語とは密接な關接を持つて居るもので、文字は言語の二大缺點を補ふ爲に生じたものである。卽、言語は其發表され瞬間は存在するけれ共、數時間後迄之を保續する事は出來ない。又言論の他の一大缺點は、其音聲の聽取される範圍が部分

的に制限されて、一時に廣い範圍の人達に傳へる事は不可能な事である。文字は之等の缺點を補ふ爲に生じたものであるが、之を要約すれば、文字は言語の時間的缺點と、空間的缺點を補ふものと謂ふ可きである。併して、言語も文字に依つて表はすと、永久に存在するし且遠隔の人達に同時に傳へる事が可能となる。加ふるに印刷術の發達、發聲機關の發明、交通機關の進步と共に言語使用の價値も高まり、其勢力も加はつて來たのである。然らばかく重要視されるに至つた文字とは何？之を一口に定義すれば、文字とは上述の言語を形で以つて表はした一種の符號と謂ふ可きである。而して文字には其成立に依つて、次の數種がある。

一、指事文字　二、象形文字
三、形聲文字　四、會意文字
五、轉注文字　六、假借文字

更に我々が通常呼んで居る、文又は文章とは何？之を一口に謂へば、文とは文字を以つて纏つた思想を書綴つたものである。從つて文字を以つて、無意味な思想を書綴つたものは決して文又は文章ではない。

（例）山太郎飛ぶ花なり。

右の文例の如きは、文字を徒らに羅列したもので、纒つた思想を表示して居ないから、之を文又は文章とは謂はれない。文又は文章である以上は、必ず纒つた思想を表はしたものでなければならない。

（例）富士山は日本一の高山なり。

右の例文の如きは、文字を書綴つて一つの纒つた思想を完全に發表して居るから、之をこそ文又は文章を呼ぶ可きである。

以上の説明で大體文又は文章の概念を明らかにしたが、更に今少し文の概念に就いて考究する必要がある。即、文又は文章をより細かに分析すれば、文又は文章は單語の集合體で成立して居る事が判る。換言すれば、文又は文章は單語の集合して、一つの纒つた思想を表現したものとも謂ふ可きである。

然らば、文又は文章の一成分を形成する單語とは何？之に就いて説明する必要があるが、之も一言を以つて蔽へば、單語とは言語に於て、最早これ以上分析する事の出來ない思想の獨立した單位である。さは謂へ、單に思想の獨立した單位と謂つたばかりでは完全でなく、更にそれが何等かの觀念を表現したものでなくてはならない。

（例）あれは梅の花ぞ。

右の例文に於て各傍線の部分は一つ一つの單語であつて、例文は要するに六單語から形成されて居る。然るに『梅』と謂ふ一單語に就いて見るに、之を『う』と『め』の二語に分析すれば、最早「梅」と謂ふ獨立した觀念を持つた語にはならない。從つて、梅は獨立した一單語ではあるが、『う』も『め』も共に獨立した觀念を有しないから、之は單語と謂ふ事は出來ない。

以上大體言語、文字、文章の概念を説明したが、終に一言すべきは文法の事である。一體文法は文の出來上る前に存在しない事は明であつて、文に對しては時間的に後の事である。先文又は文章が存在して、其等の文又は文章の中から時人が共通の現象を抽出して、更に之を組織化したものが文法である。更に換言すれば、文法とは、言語上の一種の習慣を研究者の利便の爲に組織化したもので、其國の言語の法則と謂ふ可きである。從つて各國の國語が國々に依つて相違して居る如く、各國の文法も決して一樣ではない。英國には英國獨特の文法があり、佛國には佛國の文法があり、日本にも亦日本特有の文法がある。

然らば日本文法とは如何？一體各國の文法とも其軌を同じくするが、日本文法の如きも、今日我々が使つて居るような完全な文法が古くから存在したものではない。之を歴史的に見ると、今

日の如き完全な且學問的な文法が行はれるに至つたのは、我國に西洋文化が輸入された結果、外國文法の完全な進歩したものと比較され、それの刺戟に依つて初めて成立したものである。更に日本文法の一特色として、日本文に談話に用ゐる口語と、文章に用ゐる文語と二兩樣があるが爲文法にも口語文法、文語文法の兩樣が存在する事である。所が一口に文語、口語文法と謂つても更に細密に考究すると、時代的に文、口語の差異もあるから、各時代の文語、口語文法があり、又中央と地方との地理的關係からの言語の相違もあるから、方言に關する文法も存在するわけとなり、猶此外職業に依つて言葉遣が相違が存する。かく考へれば、之等各々にも文法が存在する事となるが、かくては徒らに煩雜を増すのみである。されば今日我々の文法と稱するのは、文化の絢爛を極めた平安朝時代、就中中央の貴族階級の間に用ゐられた宮廷語を以つて之が對象として居る。換言すれば、中古文法が今日の日本文法の基礎となり、且研究の對象となつて居るのである。而して今日の文法の種類は學者に依つて意見を異にするが、大體左の種類が一般に認められて居る。

（一）記述的文法

（二）説明的文法
- 1 歴史的文法
- 2 比較文法
- 3
  - A 一般的文法
  - B 哲學的文法

終に一言すべきは、文法研究の態度に二方法の存する事である。即、其一は言語を分析的に研究する方法であつて、其研究の對象となるものは單語であるから、之を單語論と名付ける。更に他の一は言語を綜合的に研究する方法で、其對象となるものは單語間の相互の關係であるから、之を前者に對して文章論と名付ける。而して前者の單語論に依る時は、單語の形式、職分は明確にさ得るが、反面、思想發表上種々の言語が如何に使用され得るかは不明である。されば之が缺點を補ふ爲に、後者の文章論が必要となつて來るので、從つて文法の研究も、此兩面的研究に依つて完全なりと謂ふ可きである。

以上、大體文法講義上に必要な概念を説明したから、愈々本論に入る事とするが、先順序として單語論を説明し、次いで文章論の説述に移らう。

單語篇

我國に於ける單語の分類は、既に江戸時代から種々試みられたが、就中富士谷成章の分類は、識見卓拔獨創的な點で後世諸學者の研究を稗益した點が尠くない。次に其分類を示すと、

1　名＝（名詞・代名詞）
2　裝＝（形容詞、動詞）
3　挿頭＝（代名詞、副詞、感動詞、接續詞）
4　脚結＝（助詞、助動詞）

其後、鈴木朗、富樫廣蔭、鶴峯戊申等の諸學者も之に倣つて、色々の分類を試みたが、之等は要するに、日本語の性質を無視して當時輸入された和蘭の文法を模倣したもので、從つて謬見も尠くない。かくて明治時代に入るや、英、獨の文法が輸入され、之が影響を受けて之に準據して、田中義廉、中根淑、大槻文彦の諸氏に依つて漸く一定の形を爲すに至つた。而して今日普通に行はれて居る分類及其名稱は、學者に依つて往々名稱を異にする點はあるが、大體左の如く九稱類（又は十種類）に分けられる。

名詞。代名詞。動詞。形容詞。助動詞。副詞。接續詞。助詞。感動詞。數詞。

而してかく分類された單語の各種類を品詞と呼ばれるから、單語は九品詞（又は十品詞）に分類

されるわけである。

第一章　名詞及數詞

（一）名詞　名詞とは事物の名稱を表す單語である。即、之を例示すると、

（例）花の雲鐘は上野か淺草か。

右の文例に於て、傍線を施した『花』『雲』『鐘』『上野』『淺草』等は何れも事物の名稱として用ゐられた單語であるから、之等を名詞と稱する。而して上述の名詞を場合に應じて色々に分類し、之に各名稱を與へて論ずる學者もあるが、一體夫等の事は深い根據はなく、只西洋文典の模倣であつて學問上は無價値の事である。西洋文典に於ては之等の分類は必要缺くべからざるものであるが、我國の名詞には冠詞や性の關係もなく、又地名や人名等の個有的な名詞を大文字で記す必要もなく、更に單數複數の如く數の關係も全然ないからである。乍併一面に於て、數ある名詞を悉く理解する事は比較的困難であり、個々の場合に於て特殊な用法を理解する事も困難が伴ふので、大體次の種類に分類する。さは謂へ、かゝる分類は理解を確實にする爲の方便であつて、名詞の必然的性質とは見られない。

一、普通名詞
二、個有名詞

普通名詞と稱するのは、同じ事物に共通に用ゐる名詞であつて、例へば『山』『河』『花』『心』『忍耐』『勉强』等は之に屬する。何んとなれば『山』と謂へば大山、高山を問はず、地理的關係を論ぜず、悉く共通に用ゐられる名詞であるから、之を普通名詞と稱するのである。

個有名詞と稱するのは、或特定の事物に限つて用ゐる名詞であつて、例へば『日本』『富士山』『利根川』『乃木大將』等は之に屬する。卽、富士山と謂へば、唯一不二の山に對する名稱であるから、之を個有名詞と稱せられる。

(二)數詞　數詞とは、事物の數量又は順序を數へるに用ゐられる單語である。

(例)　一、二、十、百、千、萬、二百箇、第一、何十番、第何號……

右の如き單語を數詞と稱するが、之は上述の名詞に屬するものである。

更に數詞に就いて一言すべきは、數詞とは元來日本個有のものと、他は漢語を基礎とするものとの二種類がある。先前者に就いて說明すれば、『ひ』『ふ』『み』『よ』『とを』の如きものと、『十』を『そ』、『百』を『もゝ』又は『ほ』、『千』を『ち』、『萬』を『よろづ』、『二十』を『はたち』と稱するのも之に屬する。更に十以上の數を個有的に表はさんとすれば、『あまり』『まり』といふ語を添へて之を表示する。

(例)　二十五—はたちあまりいつつ

十二—とをまりふたつ

更に『十一年』を個有的數詞に依つて表はさんとすれば、『とをとせあまりひととせ』と謂ひ、又三分の一の如き分數を表はさんとすれば、分母と分子の關係を示す爲に、助詞の『が』を挿入して、『みつがひとつ』の形を以つて表す。然るに、個有數詞を使用せんとすれば、上述の如く頗る不便であり且複雜不正確の點が尠くない。されば漢語の輸入されて以來、漢語の數詞は簡單明瞭であるから、追々之が使用が盛んとなり、個有數詞を壓するに至つたのである。

次に漢語を基礎とする數詞には「一」「二」「三」「十」「百」「千」「萬」の如きものがある。更に端數を表はさんとするには、『有』『又』等の語を挿入して、『二十有五』の如き形のものがあり、又單に『二十五』の形を以つて表はされ、分數も分母と分子の關係を示さん爲、『が』『の』の如き助詞を挿入して、『五が三』『二の一』の如く表はす形と、現在行はれて居る如き『三分の一』の形も使用されて居る。

更に之と關聯して說明すべきは、或數詞が如何なる種類の數を表はすかを明瞭にする爲、他の適宜な語を附隨せしめて表す方法がある。之に本來個有なものと、漢語に依る二樣の表し方がある。

一、個有のもの――ひと夜。み月。む棹。よたり。五か。

二、漢語によるもの――二本。三軒。五冊。一枚。二圓。第一番。三號。

三、兩者の混同せるもの――百棹。五十筋。

右の方法で之を表はし得るが、之に就いて學者の或者は、上に附いて純粹の數の觀念だけ表はすものを、本數詞又は單に數詞と呼び、下に附く部分を助數詞と呼んで、數詞を之等の二種類に分類するが、數詞と呼ぶ事は先許すとして、助數詞と呼ぶ事は妥當を缺く點があるので、之は接尾語なりと見る事が正しい。

【參考】（一）日本の名詞に數の觀念のない事は上述したが、乍併、日本の名詞に依つて複數は表はし得られる。

（例）諸人。人達。人々。衆人。子供。

右の例の如く、名詞に複數を意味する詞を前後に附して表はし得られる。

（二）名詞の中には、『もの』『こと』『つもり』『ため』等の如く、名詞としての形式的意義があつて、實質的意義の存しないものがある。

第二章　代　名　詞

（三）代名詞　代名詞とは、事物の名稱の代りに用ゐた單語であるが、更に換言すれば、事物其物を直接に指すことなしに、間接に之を指す單語である。

而して代名詞は便宜的手段に依つて、人稱代名詞と指示代名詞の二種に大別し、更に各々を細別するが、左に之を表示して概說せん。

先人稱代名詞に就いて說明すれば、之は人の本名を謂ふ代りに用ゐられるもので、左の四種に分類される。

（一）人稱代名詞

第一人稱（自稱）	第二人稱（對稱）	第三人稱（他稱）	不定稱
あ、あれ、わ、われ、わたし、おのれ、わらは、それがし、みども、てまへ、（口語ではわたくし）	な、なれ、なんぢ、そなた、おまへ、そこもと、そち、（あなた）	か、かれ、あ、あれ、あいつ、（あの人）	た、たれ、だ、だれ、なにがし、（たれ、どなた）

右の表に就いて簡單に說明すれば、第一人稱（又は自稱）とは話者自身を指す代名詞であり、第二人稱（又は對稱）とは話の對者を指すもの、第三人稱（又は他稱）とは話中に現はれ來る人を指し、不定稱とは第一、二、三人稱ならざる人を指す代名詞である。猶人稱代名詞に就いて一言附加すれば、之は時代に依る變遷が多く、上表の『わ』『われ』『あ』『あれ』等は古代に多く使用され、平安朝以後は多く『わ』『われ』が第一人稱として用ゐられたが、かゝる變遷は他のものにも多い事は注意すべきである。

更に人稱代名詞は名詞から轉用されるが、其場合は多く漢語が基礎となつて、對者を尊敬し、自らを卑下するに用ゐられるものがある。

1、自稱＝小生。迂生。小官。野生。僕。自分。余。拙者。乃公。……

2、對稱＝君。汝。御身。貴殿。貴官。貴君。貴下。足下。閣下。殿下。貴樣。その方。……

3、他稱＝彼。殿下。……

之等は說明する迄もなく名詞であるが、此場合代名詞に轉用されて、或は尊敬し或は卑下し、或は對者を輕蔑する意味に變じたものである。一體、我國は長き封建制度の餘弊として階級感念が强く、爲に各階級に於ける代名詞の使用及種類が多く、例へば今日商人と學生との對話を見る

も、一人稱に於て既に大いなる相違が認められる。之を歐米に比較して見ても、日本の代名詞の微妙なる區別及種類は、世界に冠たりと稱せられる程である。

猶人稱代名詞は、其人稱の變化に依つて他の意味に轉ずる場合がある。例へば第一人稱の代名詞『われ』『てまへ』を二人稱に用ふる時は、第一人稱たる意味は轉じて對者を輕蔑することゝなり、又三人稱たる『あなた』を一人稱二人稱に轉用する時は、對者を尊敬することゝなる。

更に『おのれ』『おの』は、一、二、三、人稱に共通して用ゐられるが、就中第一人稱に多く用ゐられる。されば之を特に反射指示代名詞と呼ぶ學者もある。

以上人稱代名詞に就いて簡述したから、次に他の一種類たる指示代名詞を說明せん。

（二）指示代名詞

種類＼名稱	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ、この（口語ではこれ）	そ、それ、その（それ）	あ、あれ、か、かれ（あの、あれ）	いづれ、なに ど、どれ（どの、どれ）
場所	こ、ここ（ここ）	そ、そこ（そこ）	あ、あしこ、かしこ（あそこ）	いづこ、いづく、いづら（どこ）

方向			
こ、こち、こなた（こつち、こちら）	そち、そなた、（そつち、そちら）	あち、あなた かなた（あつち、あちら）	いづち、いづかた、どなた（どつち、どちら）

指示代名詞の分類及各名稱は上表に依つて明かであるが、猶一言附加すべきは、本來指示代名詞に屬するものが、變轉して人稱代名詞となり、以つて尊敬を表はすものが存する事である。卽指事代名詞中の場所を表はす『ここ』なる代名詞は、人稱代名詞第一人稱として轉用せられる。又『こち』『こなた』は上表に依つて明かな如く、指示代名詞中の方向を示すものであるが、之が人稱代名詞第一人稱、第三人稱に用ゐられる。又『そち』『そなた』『そこ』も同樣第一人稱第三人稱に轉用され、『あなた』は古くは第三人稱に用ゐられたが、今日では第二人稱に用ゐられる。之等は要するに、人を直接指すのを失禮なりとして、其人の所在及方向を以つて之に代へるから、從つて之等の指示代名詞は人稱代名詞に轉じて敬稱となるのである。

（四）體言　上述した名詞、數詞、代名詞を總稱して體言と稱するが、此名詞に就いては古來學者に依つて說を異にする。從來體言に就いては、活用しないからの名詞なりと說かれたが、之に對し山田孝雄氏の說に依れば、『體言とは必ずしも活用しない事を意味しない。體とは作用、現象

に對する實體の義である。』と述べて居る。

【參考】（一）我國の代名詞には、歐米の如く數の觀念に依る用方の變化はないが、然も猶、上述の名詞の場合と同じく、或語を補ふ事に依つて複數を表はし得られる。

（例）我々。君等。彼達。汝等。汝達。汝共。

（二）我代名詞も歐米のそれの如く、所有代名詞は全然ないが、所有の意味を含む形の代名詞は作り得られる。

（例）我の。汝の。彼の。

第三章　動詞（其一）

（五）動詞　動詞とは事物の作用（出づ、行く）又は存在（有る）を表はす單語である。

（例）山を越へ河を渡りて里に出づ。

（例）生命ある者は王事に努むべし。

右の文例に於て、傍線を施したる單語は、事物の動作、存在を表はしたものであるから、之等の單語を動詞と稱する。

一體、動詞なる名稱は、明治七年田中義廉によつて提唱されたもので、其以前は『形狀の詞』『作用の詞』と稱せられたものである。

更に一言すべきは、『有る』と謂ふ動詞は事物の存在を現はす單語であるから、上述の定義に依つて動詞である事は明である。然るに之に對し『無し』と謂ふ單語は、後述する形容詞として說かれて居るが、之を一味の上から觀察すれば、前者を動詞とし後者を形容詞とすべき明確な理由は發見されない。從つて古くは、此兩單語を特別なるものとして「存在言」と謂ひ、『有る』のみ切離して『形式用言』なる名稱を與へて居た。併し、かゝる形式上の分類の瞬昧も、後述するが動詞の活用に依つて、兩者の區別を明確にする事が出來る。

(六) 動詞の活用と名稱　今動詞『讀む』『死ぬ』に就いて見るに、

1
イ、本を讀まむ。
ロ、本を讀みたり。
ハ、本を讀む。
ニ、本を讀む人あり。
ホ、本を讀めば益多し。
ヘ、本を讀め。

2
イ、諸共に死なむ。
ロ、一門悉く死に絕ゆ。
ハ、戰爭にて死ぬ。
ニ、王事に死ぬる人多し。
ホ、我死ぬれば天下は足利氏に歸せん。
ヘ、潔く王事に死ね。

右の例文を見るに、動詞は用ゐ方の異なる事に依つて、語形に變化を生ずる事が判るが、此語形の種々に變化する事を動詞の活用と稱する。而して上例に依つて、更に動詞は五十音圖の一行に限つて活用し、決して他行に亘らない事と、又動詞の活用形には六種ある事が分明である。更に換言すれば、上表の『讀む』と謂ふ動詞に就いて見るに『讀ま、讀み、讀む……』と語形が變化するが、之を動詞の活用と稱し、五十音のマ行の一行に活用して、其語形の變化に六種ある事が明かである。獨り『讀む』のみに限らず、動詞は總て六種の異なる活用形を有し、更に五十音の一行に限つて活用し、決して他行に亘らないものである。

かくて動詞は文法上の取扱ひの利便の爲、上述の六種に分類し、夫々各々に名稱を與へて居るが、之を左に表示せん。

動詞の活用表

變化	名稱	定義	文例
第一變化	未然形（將然形）	假定の意を表はす形	本を讀まむ
		『む、ば、ず』に連續する	
第二變化	連用形	用言に連續する形	本を讀みたり
		『たり』に連絡する	

第三變化	終止形（中止形）	文の終止する形	本を讀む
第四變化	連體形	體言に連續する形	本を讀む人あり
第五變化	既然形（已然形）	確定の意を表はす形 『ば、ど、ども』に連續する	本を讀めば益多し
第六變化	命令形	命令を表はす形 『よ』に連續する	本を讀め

更に上表の名稱に亙つて概說せん。一體動詞の活用形は、活用形そのまゝで完全に意味を表はし得るものと、他の語と連結して初めて其意味を表はすものとの二つがある。例へば上表の『讀む』なる動詞に就いて見るに、『讀む』はそれ自身で完全に意味を表はすが、『讀ま』はそれ自身では決して完全なる意味は表はし得ない。乍併、『讀む』のみ存するとすれば、未來、否定の場合は表はし得ないから、此點に『讀ま』の形が必要となる。此の如く動詞の活用形は、夫々特定の

用法が固定されて、夫々必要的なものであると同時に、彼此互に取換へる事は出來ない。

偖、上表の第一變化形を見るに、動詞それ自身では完全なる意味は表はし得ない。されば此動詞の下へ助詞の『む』『ば』『ず』を連續して、夫々必要なる用法に充てられる。即、『む』の附く場合は事の未だ然らざる狀態を表はし、『ば』の附く場合は事の假定條件なるを表はし、『ず』の附く場合は打消しの意味となる。故に之等の中の一條件を採つて、之を未然形（又は將然形）と名付ける。

（例）本を讀まむ。（未然の意）
本を讀まば益あらん。（假定の意）
本を讀まず。（打消の意）

第二變化形を見るに、總て該動詞の下に動詞、形容詞（後述）の附く場合と、更に『たり』の附く場合とがある。併して後述する如く、動詞、形容詞を總稱して用言と稱するから、本形は之に連結するを以つて連用形と稱せられる。

（例）本を讀み了る。（動詞に續く場合）
本を讀みにくし。（形容詞に續く場合）

本を讀みたり。(たりに續く場合)

更に連用形に就いて一言すべきは、連用形それ自身名詞となる場合があり、他語と合成名詞をなす場合があり、文中に於いて名詞の役目をなす場合があり、文の中止となる場合がある。故に連用形を別に名詞形又は中止形とも稱せられる。

(例) はさみ。かすみ。(單獨の名詞)

犬死。空似。(合成名詞)

本の讀みを習ふ。(名詞形)

書を讀み字を習ふ。(中止形)

第三變化形を見るに、該動詞のみを以つて完全なる意味を表はし、以つて文の終止する場合に用ゐられる。故に之を終止形と謂ふ。

(例) 本を讀む。

第四變化形を見るに、何れも該動詞の下に名詞及代名詞——換言すれば體言に連結するを以つて、之を連體形と謂ふ。

(例) 本を讀む人あり。

猶連體形は文章を結ぶ用法が存し、古來の詩歌には一定の規定さへ出來た程であるが、之れは後述する。更に連體形は名詞、代名詞に直接連續する事のあるは上述したが、然るに連用形の下へ助詞『の』を挿入し、更に其下に名詞、代名詞を附する場合がある。之は惟ふに中古漢文の訓讀から準用されたものであらう。

(例) 山に登るの記。

第五變化形を見るに、何れも該動詞の下に助詞『ば』『ど』『ども』を附し、未然形の假定條件を表はすに對し、之は確定條件を表はすを以つて、之を既然形(又は已然形)と謂ふ。

(例) 本を讀めば益あり。(確定の意)

本を讀めども頭に入らず。(同上)

更に既然形は、上に「こそ」の伴ふ時は文章の結びとなるが、之も後述せん。

第六變化形を見るに、何れも該動詞のみを以つて完全なる命令の意味を表はすを以つて、之を命令形と謂ふ。

(例) 本を讀め。

併して命令形は多くの場合、該動詞の下に助詞『よ』を附して命令の意味を表はすものである

が、四段、奈行變格、良行變格活用に於ては、該動詞のみを以つて既に命令の意味を表はすを以つて、別に下に助詞『よ』を附けない。

之を要するに、如何なる動詞と謂へ、必ず上述の如く六種に分類され、從つて六語形が存する。乍併、動詞中のあるものには、同一語形を以つて二三の用を兼ねるものもあるから、此點から、或動詞の六語形を簡便に知らんとすれば、左の方法に依つて容易に見出す事が出來る。

1 或動詞——『ば、む、す』を謂ひ續く——未然形
2 同——用言、又は『たり』に續く——連用形
3 同——なし——終止形
4 同——體言を續ける——連體形
5 同——『ば、ど、ども』に續く——既然形
6 同——『よ』を續く——命令形

(七)動詞の種類—尙動詞には、其活用形が五十音圖の同行の幾段に亘つて活用するかに依つて之を類別して次の九種とする。

四段活用。上一段活用。下一段活用。上二段活用。下二段活用。加行變格活用。佐行變格活

用。奈行變格活用。良行變格活用。

以上の各種別に就いては、項を逐つて說明せん。

【參考】上述の『讀む』と謂ふ動詞に於て、『ま、み、む、め』と謂ふ助詞の部分を除くと、後に『よ』といふ共通部分が殘るが、之は毫も變化を受けぬ。從つて之を語幹と稱し、之に對し、前者の變化する部分を語尾と稱する。

第四章　動　詞（其一）

(八)四段活用—四段活用の動詞とは、五十音圖中の『ア』『イ』『ウ』『エ』の四段に亘つて活用し、以つて六種の語形を表はし得るものである。併して、五十音圖中のカ行の四段に亘つて活用するものは、之をカ行四段活用と稱し、サ行に活用するものはサ行四段活用と稱し、以下之に準ずる。更に其活用せる語形は、次の表に依つて明なる如く、終止形と連體形とは同形であり、既然形と命令形も同樣相同じきものである。一體、四段活用に宛はまるべき動詞は、各種の動詞中の最多であるが、次に其代表的なるものを表示せん。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
書	か	き	く	く	け	け
待	た	ち	つ	つ	て	て
借	ら	り	る	る	れ	れ
漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ

(九)口語の四段活用―以上の語形に關する説明は文語に就いてであるが、然るに口語の場合に於ける語形に就いて概説せんに、卽……文語に於て四段活用をなすものは、口語に於ても同樣四段活用となり、其語形も文語の場合に於ける語形と全く相等しいものである。

(10)良行變格活用―良行變格活用の動詞とは、五十音圖中のラ行の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に亘つて活用するが、此點は上述の四段活用に等しい。然るに次表に依つても明な如く、

四段活用の動詞に在つては、其終止形は「ウ段」であるが、之に對し良行變格活用に在つては其終止形は「イ段」に用ゐられる。之が兩者の唯一の相違點である。併して良行變格活用の動詞に在つては、其語形中連用形と終止形は同じく、又既然形と命令形とも相等しい。次に之を表示せん。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
有	ら	り	り	る	れ	れ
居	ら	り	り	る	れ	れ
侍	ら	り	り	る	れ	れ

上述した良行變格活用に屬する動詞は、多くの動詞中の少數のものであつて、「有り」「居り」「侍り」の三語と、更に「有り」を基礎として作られた熟語たる「いまそかり」「いますかり」等も之に屬する。

(二)口語の良行變格活用―良行變格活用に屬する動詞として、口語の場合に關して一言すれば

文語の良行變格活用に屬する動詞は、口語に於ては通常四段活用を爲すものであつて、口語の動詞には良行變格活用をなすものは有得ない。

(三)奈行變格活用—奈行變格活用の動詞とは、五十音圖中のナ行の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に亘つて活用し、更に其「ウ段」に「る」と「れ」が附隨して、以つて六語形を表はすものである。併して其六語形を見るに、他の動詞に於ては一を以つて二三を兼ねるものが有るに對し、奈行變格活用の動詞は、其六語形が悉く相違して居るが、かゝるものは動詞中獨り奈行變格活用の動詞が有るのみである。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

併して奈行變格活用に屬する動詞は、上掲の「死ぬ」「往ぬ」の二語のみである。

(三)口語の奈行變格活用—口語の動詞中には奈行變格活用を爲すものはなく、文語の奈行變格

活用に屬する動詞は、口語に於ては通用四段活用となるものである。

(四)上一段活用—上一段活用の動詞とは、五十音圖中の「イ段」の一段と、更に此段に「る」と「れ」の附隨して、五十音圖の中央より上の一段に活用をするを以つて、之を上一段活用と稱する。

併して其語形中、未然形と連用形と命令形とは相等しく、又終止形と連體形も同樣相同じものである。之を左に表示すれば、

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
似	に	に	にる	にる	にれ	に
着	き	き	きる	きる	きれ	き
射	い	い	いる	いる	いれ	い
見	み	み	みる	みる	みれ	み

併して諸多の動詞中、上一段活用に屬する動詞は次の十三語に限られて居る。

似る。煮る。干る。簸る。見る。(惟る。顧る。鑑る)射る。鑄る。著る。率ゐる。用ゐる。試みる。參ゐる。

但以上の十三語中、『用ゐる』は一方上一段活用に屬すると共に、他方後述するワ行上二段活用としても用ゐられる。

(一五)口語の上一段活用—口語に於ける上一段活用に就いて一言せんに、文語に於て上一段活用をなす動詞は、口語に於ても同樣上一段活用となり、且其語形は全く相等しい。

(一六)下一段活用—下一段活用の動詞とは、五十音圖中の『エ段』の一段と、更に此段に『る』と『れ』の附隨して、五十音圖の中央より下の一段に活用するを以つて、之を下一段活用と稱する。

併して其語形中、未然形と連用形と命令形とは相等しく、又終止形と連體形とは相同じきものである。左に之を表示すれば

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
蹴	け	け	ける	ける	けれ	け

下一段活用に屬する動詞は、上表の『蹴る』の一語のみである。一體『蹴る』に就いて少しく考察すれば、古く『蹴え』(日本書記)と訓じてワ行下二段活用の動詞であつたが、平安朝の中期頃には『蹴ゆ』(源順和名抄)に訓じてヤ行下二段活用とした。然るに時代の變遷と共に、『くゑん』、『こゆ』が約言されて今日の如く『蹴る』となつたものである。併して更に、之を下一段活用に屬せしめた時代は、比較的後世の事に屬する。即、德川時代の末期、林國雄に依つて初めて下一段活用なる名稱が稱へられ、且上述の『蹴る』を之に屬せしむるに至つたものである。

(一七)口語の下一段活用—文語に於て下一段活用を爲す動詞は、口語に於ても同樣に下一段活用となり、且其語形は共に同じである。

(一八)上二段活用—上二段活用の動詞とは、五十音圖中の『イ』『ウ』の二段と、更にウ段に『る』と『れ』の附隨して、以つて五十音圖の中央より上の二段に活用するを以つて、之を上二段活用と稱する。

併して其語形中、未然形と連用形と命令形と相等しきものである。之を左に表示せん。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
起	き	き	く	くる	くれ	き

生	き	く	くれ	き
報	い	ゆ	ゆる	ゆれ	い
恥	ぢ	ぢ	づる	づれ	ぢ

上二段活用なる名稱は、古くは中二段と稱せられたものであるが、之に屬する動詞は可成多いが、特にヤ行上二段活用に屬する動詞は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語のみである。

(一九)口語の上二段活用—口語に於ては、上二段活用を爲す動詞はない。併して文語に於ける上二段活用を爲す動詞は、口語に於ては文語の上一段活用と同樣の活用を爲すものである。

(二〇)下二段活用—下二段活用の動詞とは、五十音圖中の「ウ」「エ」の二段と、更に「ウ段」に「る」と「れ」の附隨し、以つて五十音圖の中央より下の二段に活用するを以つて、之を下二段活用と稱する。

併して其語形中、未然形と連用形と命令形とは相等しきものである。左に之を表示すれば、

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
受	け	け	く	くる	くれ	け
捨	て	て	つ	つる	つれ	て
出	で	で	づ	づる	づれ	で
交	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜ

(二一)口語の下二段活用—口語に於ける下二段活用は、上述の上二段活用の場合と同じく、之に屬する動詞はない。併して文語に於ける下二段活用の動詞は、口語に於ては、文語に於ける下一段活用と全く同じき活用を爲すものである。

(二二)加行變格活用—加行變格活用（又加行三段活用とも呼ぶ）の動詞とは、五十音圖中のカ行の「き」「く」「こ」の三段に、更に「く」に「る」と「れ」が添つたものに亘つた活用するものである。之を上述した上二、下二段活用と比較するに、前者に在つては三段に亘つて活用し、

之に『る』『れ』の附隨するに對し、後者は二段に亙つて活用して他は同樣である。從つて此點から加行變格活用を後者に對して、加行三段活用と稱するのである。

併して其語形中、未然形と命令形は相等しい。左に之を表示すれば、

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
來	こ	き	く	くる	くれ	こ

加行變格活用に屬する動詞は、上表の『來る』の一語のみである。

(三)口語の加行變格活用　口語に於る加行變格活用を見るに、文語に於る加行變格活用の終止形『く』が口語に於て『來る』と變化するのみであつて、他は文語の加行變格活用に全く相等しい。

(四)佐行變格活用　佐行變格活用（又は佐行三段活用とも謂ふ）の動詞とは、五十音圖中のサ行の『し』『す』『せ』の三段と、更に『す』に『る』と『れ』の附隨したものに亙つて活用する。之を前述した下二段活用に比較するに、後者に於ては『ウ』『エ』の二段と、更に『ウ段』に『る』『れ』の『れ』の附隨するに對し、前者は『イ』『ウ』『エ』の三段と、更に『ウ段』に『る』『れ』の附隨するものであつて、只異なる點は、後者の二段に亙つて活用するに、佐行變格活用に於ては三

段に亙つて活用する點でかる。かゝる故を以つて、佐行變格活用を佐行三段活用と稱するのである。

併して其語形中、未然形と命令形とは同形である。之を左に表示すれば、

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
爲	せ	し	す	する	すれ	せ
勉强	せ	し	す	する	すれ	せ

佐行變格活用に屬する動詞は、本來の國語に於ては、『爲す』『おはす』の二語のみである。而も『おはす』なる語を語源に遡つて考察するに『おほ』『ます』の兩語が交錯して『おはす』なる語を生じたものである。そして『ます』は古くは下二段、四段活用共活用したものであり、從つて此語より醸成されたる『おはす』も、古くは同樣下二段、四段活用に活用したものであつたが、今日は佐行變格活用の動詞と限定されるに至つた。更に『爲す』なる語に就いて見るに、此語は含める實際的意味は甚だ漠然として、單獨には用ゐられる事なく、他の種々なる語と連結し熟語を

なして用ゐられる。次にその例を示さんに

1　名詞、漢語に連結する場合

(例)門出す。心す。勉強す。運動す。

2　他の動詞の連用形に連結する場合

(例)欲りす。送りす。

3　形容詞の下に連結する場合

(例)高くす。全くす。久くす。重んず。

4　副詞の下に『に』を附し、其下に連結する場合

(例)新にす。先にす。論ず。案ず。

5　未來、推量を表はす助動詞『む』の下に、助詞『と』が附隨し、『むとす』が約言されて『んず』となる場合

(例)往なんず。まかりなんず。

以上列擧した諸熟語も、『爲す』を其基礎とせるを以つて、同じく佐行變格活用の動詞として活用する。猶以上の外、佐行變格活用の動詞となるべきものには、外國語を動詞とする時に、『爲』を

附して佐行變格活用となる。

(二五)口語の佐行變格活用—佐行變格活用の口語に就いて見るに、文語に於ける佐行變格活用の未然形『せ』は、關東語に於ては『し』となり、又文語に於ける終止形『す』は、口語に於いて『する』と變るのであつて、他の語形は全く相等しい。

(二六)　動詞活用の早見法　以上四段活用より始めて、佐行變格活用に至る九種の動詞に就いて概說したが、之に依つても明かな如く、多くの動詞中には其活用形に頗る紛はしきものが多く、爲に何れに屬する動詞なるかを識別するに、屢々誤謬に陷り易い弊がある。依つて左に之を識別する便法を說明しよう。

1　『行か……む』『讀ま……む』『問は……む』の如く、動詞の未然形が『ア段』に活用するものは、總じて四段活用の動詞に屬する。

2　『起き……む』『延び……む』の如く、該動詞の未然形が『イ段』に活用するものは、總じて上二段活用の動詞に屬する。

3　『寄せ……む』『告げ……む』の如く、該動詞の未然形が『エ段』に活用するものは、總じて下二段活用に屬する動詞である。

4　此外に殘存せる上一段、下一段活用、奈行變格、良行變格、加行變格、佐行變格活用に屬する動詞は、上述の如く、其數は甚だ少いから先づ之は暗記すべきである。

第五章　動詞（其三）

（二七）活用に依る動詞の分類　以上九種の動詞に就いて之を概說したが、之を動詞の根本主義より觀察する時は、要するに（一）五十音圖に依る活用の變化と、更に（二）一定の語幹に『る』と『れ』の附隨するものと、猶（三）『一』『二』の混合せるものとの三種に大別され得る。併し之に屬する動詞を擧げて、之を左に示さん。

（1）五十音圖の變化に屬するもの

四段活用。良行變格活用。

（2）語幹に『る』『れ』の附隨せるものに屬するもの

上一段活用。下一段活用。

（3）（1）と（2）の混合せるものに屬するもの

上二段活用。下二段活用。加行變格活用。佐行變格活用。奈行變格活用。

猶第一、第二の分類に屬する、四段、良行變格、上一段、下一段活用を正格活用とも稱し、之

に對し殘餘の上二段、下二段、加行變格、佐行變格、奈行變格活用を變格活用と稱し、依つて動詞を二大別する分類法も存して居る。

（二八）口語文法—以上動詞に關する說明は、主として文語に於ける動詞に就いて概說し、從として口語文法に關して簡述を加へたが、今此處に其等を總括して說明せん。文語に於ては如上の九種の動詞があるが、口語に於ては五種類となるが、之を左に圖示せん。

文語	口語
四段活用 良行變格活用 奈行變格活用	……四段活用
上二段活用 上一段活用	……上一段活用
下二段活用 下一段活用	……下一段活用
加行變格活用	……加行變格活用（但終止形の相違あり）

左行變格活用……左行變格活用（同　上）

以下を要するに、文語に於ける四段、良行變格、奈行變格活用は、口語に於ては三段活用に含まれ、文語の上二段、上一段活用は、口語に於て上一段活用となり、文語の下二段、下一段活用は、口語に於ては下一段活用に含まれる。更に、文語に於ける加行變格活用及佐行變格活用は口語に於ても同形なるも、只其終止形を異にするのみである。

（二九）動詞の音便―音便とは言語の發音上の利便の爲、之を他音に轉ずると同時に、之を書表はす上にも變化を與へるものである。換言すれば、發音變化と謂ふ言語上の極めて自然的な現象を認容して、之に從つて書方も變更する事であつて、かゝる事は言語上自然的であると共に、學問的に一進歩である。例へば『讀みて』『書きて』の如き動詞の連用形に、助詞『て』（口語に於ては『たり』て）を連續せしめる時、發音の利便の爲に之を『讀んで』『書いて』の如く、他音に轉ずる場合があるが、此現象を指して動詞の音便と謂ふのである。併して音便といふ現象は既に奈良朝頃から行はれたらしく、平安朝に至つては最も盛に行はれたが、當時は動詞中のカ、サ、ハ、ラ行の四段活用の動詞、而も其連用形の下に他の動詞の連結する時と、他は助動詞の連結する際に此音便の現象が生じた。即其例を擧げると、

（一）思ひ給ひ嘆く――思ひ給う嘆く。

かきはきする――かいはきする。

（二）繪に書きたる顏――繪に書いたる顏。

かき捨て給ひつ――かき捨て給うつ。

（一）の例は動詞の連用形に他の動詞の附隨するものであり、（二）の例は同じく動詞の連用形の下に助動詞の附く場合である。

然るに音便は現在に於ては、普通左の四種がある。

（一）い音便　四段活用のカ行ガ行サ行の動詞の連用形、『き』『ぎ』『し』の『い』に轉ずるものを指す。

（例）書きて……｛書いて（文語）／書いて（口語）｝

漕ぎて……｛漕いで（文語）／漕いで（口語）｝

(二)う音便　四段活用のハ行ラ行の動詞の連用形『ひ』『り』の『う』に轉ずるものを指す。

例）問ひて……問う(た)て(文語)　問う(た)て(口語)

(三)撥音便(又は『ん』音便)　四段活用のバ行マ行及奈行變格活用の連用形『び』『み』『に』の『ん』に轉ずるものを指す。

（例）遊びて……遊ん(だ)で(文語)　遊ん(だ)で(口語)

踏みて……踏ん(だ)で(文語)　踏ん(だ)で(口語)

死にて……死ん(だ)で(文語)　死ん(だ)で(口語)

(四)促音便(又は『つ』音便)　四段活用のタ行ハ行ラ行及良行變格活用の連用形『ち』『ひ』『り』が、促音たる『つ』に轉ずるものを指す。

（例）勝ちて……勝つ(た)て(文語)　勝つ(た)て(口語)

笑ひて……笑つ(た)て(文語)　笑つ(た)て(口語)

有りて……有つ(た)て(文語)　有つ(た)て(口語)

以上動詞の音便に就いて概説したが、之を要するに、音便とは發音上の變化を文字に表はしたものであつて、而も悉くの動詞に表はれるに非ずして、或特定の動詞の而も其連用形に限つて此現象が表はれるのである。今左に之を一括して表示せん。

種類	定義	例
い音便	四段活用『カ行・ガ行』の動詞の連用形『き・ぎ』の『い』に轉ずるもの	書きて＝書いて　漕ぎて＝漕いで

う音便	四段活用『ハ行』の動詞の連用形『ひ』の『う』に轉ずるもの	問ひて＝問うて
ん音便（撥音便）	四段活用『マ、バ行』及奈行變格活用の動詞の連用形『び、み、に』の『ん』に轉ずるもの	遊びて＝遊んで 踏みて＝踏んで 死にて＝死んで
つ音便（促音便）	四段活用『タ・ハ・ラ行』及良行變格活用の動詞の連用形『ち、ひ、り』の『つ』に轉ずるもの	勝ちて＝勝つて 笑ひて＝笑つて 有りて＝有つて

(三〇)動詞の假名遣―上述の音便は、言葉の變化を認容すると同時に之を書表はす上にも變化を與へるものであつたが、然るに多くの言葉の中には、發音は變化するも之を書表はす上には何等變化を生じないものがある。

(例)いへ(家)。　かは(川)

右の文例を見るに、家は發音上に於ては『いえ』の如く發音されるけれ共、之を書表はす上には其發音と一致しないで『いへ』と書表はされる。かゝる點からして、動詞の活用を書表はすに

當つては、往々誤謬を生ずるに至るのであるが、之を誤謬に陷らず正しく書く法をば假名遣と謂ふのである。左に其留意すべき事柄を簡述せん。

(一)上述したる如く、動詞は總て五十音圖の一行に亘つて活用するが、之に依つて或動詞が何行に活用するかを知り、延いて其一語形を知れば、他の語形も判明するに至るから、之を書表はす假名遣の上にも誤謬なきに至るものである。

例へば『强ひ』なる動詞が、五十音圖中の『ハ行』に活用する事を知れば、其語形の假名遣上尤も誤り易い『强ゆ』も、『强ふ』の誤なる事が明となり、又『老ゆ』なる動詞も、『ヤ行』に活用する事を知れば、其語形中尤も誤り易い『老ひて』なる假名遣は、『老いて』の誤なる事が明瞭となるものである。

(二)假名遣上必ず『い』を用ゐるべき動詞は、上二段活用に屬する『老い』『悔い』『報い』の三語のみである。何んとなれば、上述の『老い』『悔い』『報い』の諸動詞は、ヤ行に屬する動詞なるが爲である。

(三)同樣にヤ行に屬する動詞ではあるが、假名遣上『え』を用ふべき動詞は、下二段活用なる『消え』『越え』『榮え』の諸動詞と、更に同じく『ア行』下二段活用に屬する『得』が

ある。

(四)假名遣に當つて、『ゑ』を用ふべき動詞としては、ワ行下二段活用に屬する『植ゑ』『飢ゑ』『据ゑ』の三語のみである。從つて此三語以外のものは、或は上述の『え』を用ゐ、又は『へ』を用ゐるものなる事は類推に依つて明である。

(五)假名遣上『わ』を用ふべき動詞は決して有得ない。從つて『わ』は『は』を用ゐるのが正しい。

(六)假名遣上『じ』を用ふべき動詞は、サ行上二段活用に屬する『掘じ』と、サ行變格活用に屬する『感じ』『論じ』『重んじ』の類のみである。

(七)假名遣上『ず』を用ふべき動詞は、サ行變格活用に屬する『感ず』『論ず』等の外は、只サ行上二段活用の『掘ず』と、サ行下二段活用の『混ず』の二語のみである。

(三)　動詞の待遇に依る用法—名詞、代名詞に敬語的用法が存する事は上述したが、動詞に於ても之と同じく、或は對者を尊敬せん爲に自ら卑下する動詞があり、或は反對に對者を侮蔑する等の動詞があるが、今は之等に就いて二大別して簡述せん。

(一)他人の動作を尊敬する場合の用法

(二)自分の動作を謙遜する場合の用法

(一)の用法に屬する動詞から説明すれば「言ふ」なる動詞を『のる』『のたまふ』『おほす』とし、『聞く』を『きこす』『きこしめす』となし、『見る』を『みそなはす』『御覽ず』となし、『思ふ』を『おもほす』『おぼしめす』『おぼす』となせば、對者の動作を尊敬する事となる敬語的用法である。

(二)の用法は(一)の積極的敬語用法なるに比較すれば、之は消極的なる敬語的用法とも謂ふべく、自らの動作を卑下して對者を尊敬せんとする用法である。例へば『言ふ』を『申す』『きこゆ』となし、『有り』『居り』を『侍り』『侍る』となし、『與ふ』を『奉る』『參らす』となせば、自らの動作を謙遜して謂ふと同時に、延いて對者の動作の尊敬となるのである。

第五章　形容詞(其一)

(三)形容詞の意義—形容詞とは、動詞が體言の變化する屬性を現はすに對し、形容詞は體言の靜止した屬性を現はすものである。更に換言すれば、動詞が體言の動的性質を表はすに對し、形容詞は體言の靜的性質——即ち事物の狀態、性質等を表はすものである。猶一言附加すべきは、

以上の定義を以つて動詞、形容詞の區別は明瞭でない。何んとなれば、動詞の『似る』『見ゆ』『成る』等は事物の狀態を表はした語とも思はるから、上述の言を以つて之を判然と區別する事は出來ない。乍併、動詞、形容詞の區別を明確にするものは、兩者の活用形を見るに至つて初めて判然たり得る。以下形容詞及其活用形を順を追つて說明せん。

(例)清き水流る。

天高く地低し。

春は溫く夏は熱く秋は涼しく冬は寒し。

右の文例に於て『清き』『高く』『低し』『溫く』『熱く』『涼しく』『寒し』等は、何れも體言の靜的性質——卽事物の狀態性質を表はした單語であるから、之を形容詞と謂ふ。

(三三)用言—體言に就いては前述したが、之に對し動詞、形容詞を總稱して用言と謂ふが、兩者の相違する點は略述したから今は之を省く。

(三四)形容詞の活用—形容詞『清し』『涼し』に就いて見るに、

1

イ、水清くば美しからん。
ロ、水清く流る。
ハ、水清し。
ニ、清き水流る。
ホ、水清ければ魚住まず。

右の文例を見るに、形容詞も動詞と同じく活用するが、其活用形を仔細に觀察すれば、動詞は五十音圖の一行にのみ活用し、其語形は六種であつたのに對し、形容詞は『カ行』『サ行』の二行にのみ活用し、而も其語形は五種である。之が兩者の著しい相異である。

猶形容詞には右の文例に於て明な如く、(一)の如き活用形を爲すものと、(二)の如きものとの二種がある。前者の如き活用形を有する形容詞の活用を『く活用』と稱し、後者の如きものを、『しく活用』と稱する。併して之等形容詞の活用形は、其用法も動詞と略々同じであるから、其語形の名稱も動詞に準ずるが、只第六形たる命令形を缺ぐものである。次に其語形及名稱を表示せん。

2

イ、風涼しくば心地よからん。
ロ、風涼しく吹く。
ハ、風涼し。
ニ、涼しき風絶えず吹く。
ホ、風涼しければ心地よし。

變化	名稱	定義	文例
第一變化	未然形	假定の意を表す形	山高くば眺よからん
第二變化	連用形（副詞形）	用言に連續する形	山高く聳ゆ
第三變化	終止形	文の終止する形	山高し
第四變化	連體形	體言に連續する形	高き山に登る
第五變化	既然形	確定の意を表す形	山高ければ眺よし

上表の各々に就いて説明せんに、第一形たる未然形は動詞に於ける場合と同じく、事物の假定の狀態を表はす形であると共に、一方助詞『ば』『ども』に連續するものである。

（例）花美しくば眺よからん。

第二形たる連用形も動詞と同じく、用言に連續する形である。更に連用形は一名副詞形と謂はれる如く、文中に於て副詞（後述）の役目をなし、其上に文の中止の用法にも使はれる。

（例）花美しく咲く。（用言に連續する例）

（同）花よく咲く。（『よく』は『咲く』なる動詞を限定してゐるから副詞の役目をなしてゐる。）

（同）松青く砂白し。（中止の例）

第三形たる終止形は、動詞の場合と同じく文の終止の場合に用ゐられる。

（例）花美し。

第四形なる連體形も動詞と同じく、體言に連續する形であり、又動詞の時にも一言した如く、上に特別の動詞が來る時に文の結びとなる場合もある。

（例）美しき花咲亂る。（體言に連續する例）

聲聞く時ぞ秋は悲しき。（文の結びの例）

第五形たる既然形（又は已然形）も動詞と同じく、此下に助詞の『ば』を附して確定條件たる事を表はし、更に連體形の場合と同じく、上に『こそ』なる助詞の來た時に文の結びとなる。

（例）花美しければ眺よし。（確定條件を表す例）

月みれば千々に物こそ悲しけれ。（文の結びの例）

（三四）く活用、しく活用―形容詞の活用形には『く活用』と『しく活用』の二種の存する事は上

述したが、此處に其等に就いて更に説明せん。

『く活用』の語形を表示すれば、

く活用					
語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形
善	く	く	し	き	けれ
高	く	く	し	き	けれ

の如き語形を有する。併して上表に依つても明な如く、語形中其未然形と連用形とは同形である。

『しく活用』の語形を表示すれば、

しく活用					
語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形
惡し	く	く	(し)	き	けれ
美し	く	く	(し)	き	けれ

の如き活用形を有する。『しく活用』も『く活用』と同じく、其語形中未然形、連用形は同形であり、又共に上述の如く命令形を缺ぐのである。

(三五)合成の形容詞—形容詞に就いては、其意義並びに活用に就いて概説したから、本項に於いては、本來の形容詞ではなくして他語を合成し、又其語自體の重疊に依つて生ずる形容詞に就いて一言せむ。

(一)他語と合成の形容詞

或語の下に『けく』『たく』『らし』『なし』等の接尾語を附して、以つて形容詞となる場合がある。

(例)露けく。　靜けく。

平たく。　めでたく。

男らし。　女らし。

おぼつかなし。　はしたなし。

他語と形容詞の合成に係つて、更に新らしい一つの形容詞を生ずる場合がある。

(例)口惜し。

うら淋し。

かぐはし。

右の諸例は、本來形容詞たる『惜し』『淋し』『くはし』に、他語たる『口』『うら』『か』等の語が合成して、更に『口惜し』『うら淋し』『かぐはし』等の新形容詞を生むに至つたのである。

猶合成の形容詞ではないが、便宜上此項に於て、形容詞並に他語の重複して形容詞を生ずる場合を説明せん。

(二)形容詞、他語の重複して生ずる形容詞

(イ) 形容詞の重複

(例)輕々し。痛々し。長々し。

右の例は、本來『く活用』に屬する『輕し』『痛し』『長し』が、重複するに至つて本來の『く活用』から『しく活用』に轉じたものである。

(ロ) 名詞の重複

(例)もの〳〵し。神々し。こと〴〵し。

右の例は本來名詞なるにも係らず、其重複に係つて形容詞を生じた場合である。

(ハ) 動詞の重複

(例)おどろおどろしく。

(ニ) 副詞の重複

(例) げに〳〵し。うべ〳〵し。

第七章 形容詞 (其二)

(三六)轉成の形容詞—此項に於ては前章に引續いて、本來形容詞ならざる他語の轉成して形容詞となり、又其反對に本來形容詞が他語に轉成して、以つて形容詞たる本性を失ふものがある場合を説明せん。

(一)他語の轉成したる形容詞

(イ) 名詞の轉成

(例)大人し。男々し。功勞し。美々し。

右の例に於て明な如く、本來は名詞なるも轉成して形容詞となつたものである。此名詞の轉成

の場合には、本來の國語の名詞『男々し』もあれば、『美々し』の如く漢語の名詞の轉成する場合もある。

（ロ）動詞の轉成

（例）美まし。狂ほし。勇まし。騷がし。

（ハ）副詞の轉成

（例）遙けし。のどけし。甚し。

（二）形容詞の他語に轉成

本來形容詞なるにも係らず、單獨又は他語を伴つて他語に轉成する場合を説明せん。

（イ）名詞への轉成

（例）近くを見る

辛し。重し。

健。等

右の例を見るに「近く」なる形容詞の未然形は、轉成して文中に於ける名詞の役割を演じ、『辛し』等の終止形はその儘名詞となり、『健』等も之と同じく、而も多く人名等に使用せられる。

（例）恥かしの姿。

故きを溫ねて新しきを知る。

右の例を見るに、『恥かし』なる形容詞の終止形は、下に助詞『の』を伴つて名詞となり、『故き』『新しき』は連體形が其儘名詞の役割を演じたものである。

以上は主として形容詞の活用形の轉成なるが、次に形容詞の語幹及語幹の他語と合成して、以つて名詞に轉成する場合を説明せん。

（例）青。赤。圓。

夜寒。嘉詞。

遠淺。

右の例を見るに、形容詞の語幹たる『青』『赤』『圓』が其儘で名詞となり、『夜寒』の如きは『寒し』なる語幹に『夜』なる他語との合成して名詞に轉成したもの、『遠淺』は語幹の重複して名詞と成つたものである。

（例）手荒の振舞。面白の遊。

右の文例を見るに、語幹たる『荒』の下に助詞『の』を附して名詞に轉成したるもの、『面白』

も之れと同様である。

(例)高み。深み。荒み。面白み。

高さ。深さ。可笑しさ。淡さ。

右の例を見るに、形容詞の語幹の下に、助詞『み』『さ』を附して名詞に轉用されたものである。

(ロ) 副詞への轉成

(例)風をいた み岩打の波。

秋の田の刈穂の庵のとまをあら み。

右の文例を見るに、形容詞の語幹の下に助詞『み』を附して、以つて副詞と同じ役目を演じて居る。乍併らかゝる例は多く詩歌に現はれて、散文に現はれる事は稀である。

(例)惱ましげに見ゆ。

嬉しげに走る。

右の文例は形容詞の語幹の下に、助詞『げ』を附し、以つて文中に於て副詞の役目を演じて居るものである。

(三七) 口語の形容詞 上述した所は文語に於ける形容詞の説明であつたが、今度は口語の形容詞に就いて一言せん。

先づ『く活用』に就いて見るに、口語の時は文語に於ける終止形『し』及連體形『き』は共に『い』に變ずる。之を左に表示すれば、

く活用					
	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形
文語	く	く	し	き	けれ
口語	く	く	(い)	(い)	けれ

となる。

猶『しく活用』に就いて見るも『く活用』と同様に文語の終止形『し』及連體形『しき』は轉じて『しい』と變ずる。之を表示せんに、

となる。

し く 活 用					
	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形
文語	しく	しく	し	しき	しけれ
口語	しく	しく	(しい)	(しい)	しけれ

(三八)形容詞の音便―形容詞も動詞と同樣に音便の現象を生ずる。但動詞の音便は上述した如く其活用形中の連用形のみ此現象が生ずるに對し、形容詞は連用形と連體形の兩形に音便が表はれる。之點が兩者の大きな相違である。更に動詞は音便に四種類あるに對し、形容詞は連用形に現はれる『う音便』と、連體形に現はれる『い音便』の二種のみである。

(例)誠に口惜しく/……誠に口惜しう/。

苦しき/極……苦しい/極。

右の文例を見るに、形容詞『口惜し』の連用形『口惜しく』が音便となる時は『口惜しう/』と『う音便』に變化し、又形容詞『苦し』の連體形『苦しき』が音便となる時は『苦しい/』と、

『い音便』に轉化するのである。以上を左に要約して表示すれば

種類	定義	例
い音便	形容詞連體形『き』の『い』に轉ずるもの	善き/人――善い/人
う音便	形容詞連用形『く』の『う』に轉ずるもの	正しく/――正しう/

となる。

(三九)形容動詞―形容動詞は、其言葉の性質なり意味は全く形容詞に酷似して居るが、其語形は全然形容詞と異る語尾變化を有して居る。更に換言すれば、良行變格活用の動詞『有り』が種々の語と熟語をなし、其活用形も良行變格活用と全く同一な活用をなすものを謂ふのである。次に之を逐次説明せん。

(一)形容詞の連用形に『有り』の結合せるもの(カリ活用)

形容詞の連用形、例へば『善く』『惡しく』が『有り』と結合して『善くあり』『惡しくあり』と續くものが、發音の便宜上『く』と『あ』が約つて『か』となり、『善かり』『惡しかり』と轉化し、更に其活用形は良行變格活用と全く同一となる時がある。かゝるものは語形は動詞のやう

であるけれ共、語の性質、意味は全く形容詞に似て居るから、形容動詞と名付けるのである。併して本項説く所の如く、形容詞連用形と『有り』の結合して成立した形容動詞を特に『カリ活用』と謂ふ。左に之を表示すれば

種類	名稱	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
第一類	カリ活用	善悪し	から	かり	かり	かる	かれ	かれ

古文では上表の六種の語形は悉く用ゐられたが、現代文では六語形の中終止形と既然形とは殆ど用ゐられない。

(二)副詞に助詞『に』と其下に『有り』の結合せるもの(ナリ活用)

副詞の下に助詞『に』と「有り」が結合して『に有り』が約つて『なり』と變じ、以つて奈行變格活用の如き活用をなすものがある。

(例)四邊靜なり。

室内明なり。

右の文例を見るも『靜』『明』の如き副詞の下に、助詞『に』と『有り』の結合して約言された『なり』が附隨して居る。之等の語も、其語形は動詞と同樣ではあるが、其語の性質意義は形容詞であるから、同じく形容動詞に屬するものである。併も特にかゝる語形を『ナリ活用』に呼ぶが、今之を左に表示すれば

種類	名稱	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
第二類	ナリ活用	靜	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
		明						

上表の六種の語形は現代普通文に悉く使用されて居る。

猶之と關聯して説明すべきは、上述の助詞「に」と「有り」の結合して出來上つた「なり」は、上述の副詞以外に名詞、代名詞に附隨する場合がある。

(例)正行は孝子なり。

父は太政大臣なり。

右の文例の如く「なり」は名詞、代名詞に附隨して用ゐられる時は、其等の語を指し定むる意味に表はすから、特に之を指定動詞と呼ばれてゐる。

（三）漢語に助詞「と」と「有り」の結合せるもの（タリ活用）

或漢語の下に、助詞「と」と「有り」が結合し、「と有り」が約つて「たり」となり、以つて良行變格活用の如き活用形を有するものがある。

（例）海波渉茫たり。

辯舌滔々たり。

右の文例を見るに、「たり」は「渉茫と」「滔々と」等の漢語から轉成した副詞に附隨して用ゐられたものである。此等の語も上述の如く、形容動詞に屬するものであつて、特に『タリ活用』と呼ばれる。之を左に表示すれば、

種類	名稱	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形
第三類	タリ活用	渉茫	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
		滔々						

となる。

猶「たり」も「なり」と同樣、指定動詞と呼ばれ、名詞、代名詞の下に附隨して用ゐられる場合がある。

（例）彼は義士たり。

君君たり。臣臣たり。

（參考）（一）四段活用の動詞、及佐行變格活用の動詞の連用形から『有り』に結合し、更にそれが約つて、

（例）行けり。
讀めり。
言へり。
せり。
四段活用
佐行變格活用

の如き形をなす場合がある。併して之を一見すると、四段活用の既然形、佐行變格活用の未然形に『り』を添へた如き形をなし、更に其意味も作用の繼續存在して居るものを表はすものである。併して今日では終止形のみ用ゐられる。一體此語形は、上述の四段活用、佐行變格活用に限るものであるが、往々下二段活用の動詞にも亂用して

（例）受けり。
捨てり。

と使はれるが之は誤謬である。

(二)『如し』と謂ふ形容詞は特別なものであつて、其語形中既然形を缺ぎ、更にそれ自身獨立しては形容詞たる役目を全うせず、上に名詞、代名詞、又は用言の連體形を受けて、初めて形容詞たる役目を全うするものである。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形
如	く	く	し	き	／
				／	／

(例) 歳月は流るゝ如し。
滿山の櫻雪の如し。

第八章 副詞

(四〇)副詞の意義—副詞とは(一)主として動詞、形容詞、換言すれば用言に副つて其意義を限定する爲に用ゐられる單語である。更に副詞は用言の意義を限定するのみならず、稀には(二)他の

副詞の意義(三)體言の意義、語句、文の意義を限定する事もある。

(例) 學未だ成らず。
速かに走る。
櫻は最も美し。

右の文例を見るに『未だ』『速かに』は『成る』『走る』等の動詞に副つて、其用言の意味を限定したもの故副詞である。又『最も』は『美し』なる形容詞に添つて其意義を限定した副詞で、之等は何れも用言の意義を限定した例である。

(例) やゝ暫く考ふ。
風頗るはげしく吹く。

右の文例を見るに『やゝ』なる副詞は下に來る『暫く』なる副詞に添つて其意味を限定したるもの『頗る』も同樣に『はげしく』なる副詞を限定したるもの、換言すれば副詞が他の副詞の意義を限定したものである。

(例) やゝ北。
最も東。

只一人。

右の文例を見るに『やゝ』『最も』『只』なる副詞は、下に來る『北』『東』『一人』等の體言の意義を限定したもので、此點は從來の文法書の閑却した所である。

上述の説明に依つて、略副詞の概念を説述したが、一體副詞は用言と異つて語尾變化を有して居ない。又其文中に於ける位置は、普通の場合は多く上に副詞が來り、其下に被限定語が來るものであるが、詩歌や特種の文になると、往々此位置が倒置される場合もある。

(四)副詞は往々中間に挿入される語を隔てゝ、下に來る用言の意義を限定する事がある。

(例) 幸にして虎口を脱せり。

遙かに山を望む。

右の文例を見るに『幸にして』なる副詞は、下に來る『虎口を』なる語を限定せず、之を隔てゝ下の『脱せり』なる用言の意義を限定したるもの、次の例も之と同樣である。

(四)副詞の種類　副詞は本來の副詞もあるが、又他語の轉成したるもの、更に他語を合成して副詞となつたものがある。今之を説明せん。

(一) 本來の副詞

豈に。恰も。いと。いや。愈々。苟くも。かく。嘗て。必ず。しか。暫し。暫く。屢々。頗る。忽ち。つら〳〵。尚。甚だ。殆ど。益々。皆。最も。專ら。稍々。漸く。さ。いさゝか。うべ等。

右に掲げたものは本來の副詞の一班である。

(二) 轉成の副詞

(イ) 名詞からの轉成

昔。今年。今。等

(ロ) 代名詞からの轉成

おのれ。おのおの。それ〳〵。いづれ。等

(ハ) 數詞からの轉成

よろづ。等

(ニ) 動詞からの轉成

みだりに。頻りに。ならびに。たとひ。あまり。つまり。しみ〴〵。とり〴〵。しぶ〳〵。おづ〳〵。等

（ホ）形容詞からの轉成

うす〳〵。久々。能く。しづ〳〵。はや〳〵。久しく。はや。遙。長々。とく〳〵。よく〳〵。

（四三）合成の副詞―副詞には本來の副詞及轉成の副詞のあるは事は上述したが、此以外に諸種の語と合成して副詞となるものがある。併し其合成する語の下に助詞「に」「と」「て」を附して、副詞となるのである。之を左に說明せん。

（イ）名詞に助詞の合成したもの。

常に。誠に。徒に。稀に。幸に。等

（ロ）漢語に助詞の合成したもの。

斷乎と。洋々と。切に。丁寧に。堂々と。等

（ハ）代名詞に助詞の合成したもの。

茲に。

（ニ）動詞に助詞の合成したもの。

凡て。却つて。謹んで。敢へて。極めて。等

（ホ）形容詞に助詞の合成したもの。

つばらに。きよらに。さやかに。なめらかに。しめやかに。しづ〳〵と。きら〳〵と。とぼとぼと。はら〳〵と。ひしひしと。等

猶以上の外、助詞「そ」「ば」「ず」と合成して副詞となるものに、

例へば。絕えず。思はず。恐らく。

右の例は動詞に助詞の伴つて副詞となりたるもの、

何ぞ。いづくんぞ。

右の例は代名詞に助詞を伴つて副詞となつたものである。

（四四）他の成因に依る副詞―以上の轉成、合成の外、其他の理由に依つて副詞となるものがある。

其先第一は、元來は動詞なるも其連用形に助詞「て」を伴つて

すべて。まして。

等があるが、之も副詞に屬するものである。第二は擬音擬態的理由に依つて生ずる、

そよ〳〵。さつと。から〳〵。

なる副詞が存する。

第三は疊語に依る、換言すれば或語を重複して副詞となるものであつて、

段々。追々。ゆる〳〵。つく〳〵。

等は此例である。猶此外の理由に依つて、

夜もすがら。手づから。おのづから。剰へ。況んや。

の如き副詞もある。猶一二の語の重複するにとゞまらず、數多の語の集成して、一文として副詞の役目を演ずるものがある。之は正確に云へば副詞句であつて、後述文章編で説明するが、此處には只參考として掲げん。

(例) 水清ければ魚住まず。

しづ心なく花の散るらん。

右の文例は、上の「水清ければ」「しづ心なく」の句が、相集つて文中に於ける副詞の役目を演じて、下に來る「魚住まず」「散るらん」の句を限定したものである。

(四五)副詞の分類—以上副詞に關して略概説したから、此處に之を綜括分類して參考とせん。

副詞を意義の上から觀察すれば、次の如く分類され得る。

種類	例
時に關するもの	今日。早く。既に。未だ。昔。明日。今。嘗つて。何時も。等
場所に關するもの	此處に。其處に。傍に。前に。此方に。彼方に。後に。等
狀態に關するもの	堅く。明に。平かに。自然に。美しく。善く。惡しく。そよ〳〵と。はら〳〵と。から〳〵と。等
程度に關するもの	稍。頗る。甚だ。非常に。聊か。全く。等
心情に關するもの	快く。樂しく。恭しく。謹んで。溫かに。等
數量に關するもの	僅に。聊か。澤山。萬一に。第一に。半。等

猶以上の分類に依る外、人に依つて「談話の狀態に關する」一種類を認める說もある。卽、話者の話が斷定なるか、推量、願望なるか又禁止なるかの場合に使はれるもので、

（例）恐らく。願くば。蓋し。ゆめ〳〵。須らく。いさ。をさ〳〵。よに。よにも。忽らく。等は之である。併して上述の副詞が上に來る時は、上下相呼應して文を終結するものである。換言すれば、上が肯定なれば下も肯定の文となるものである。

（例）人はいさ心も知らず。

をさ〳〵怠り給ふことなし。

第九章　接續詞

（四）接續詞の意義―接續詞とは、（一）語と語、（二）句と句、（三）文と文との間に挿入して、上下の語句を連續し、文に在つては文の意義を結合する單語を謂ふ。

（例）見わたす限山又山。

雲か霞かはた雪か。

敵は小勢なり、さりながら侮り難し。

右の文例を見るに、（一）は山といふ單語の下に「又」が添ひ、下に來る山に接續したるもの、（二）は「雲か霞か」なる句を、「はた」に依つて下の雪と結合せるもの、（三）は上の文を「さりながら」に依つて、下の文と意義を結合せしめたもので、從つて「又」「はた」「さりながら」は何れも接續詞である。

一體接續詞は前章に說述した副詞の如く、語尾變化を有しない單語であるが、接續詞は副詞と同じやうに、或意味に於て用言を限定する事があるから、ともすれば副詞と誤り易い。此點は文中に於ける性質をよく考察して、明に區別すべきである。今左に誤謬に陷り易い例文を示し、彼我の留意考察すべき點を示さん。

（例）雨また降り來れり。（副詞）

山また山を越ゆ。（接續詞）

T氏も尋いで來る。（副詞）

T氏は昨日來り、尋いでM氏も來會せり。（接續詞）

木の葉かつ散る。（副詞）

書を讀みかつ字を習ふ。（接續詞）

其事或は然らん。（副詞）
海或は山に行かん。（接詞）

以上接續詞の意義を概說したが、之を綜括して左に表示すれば、

種類	定義	例
(一)	語と語を接續するもの	山又山。月且花。松及び杉。
(二)	句と句を接續するもの	欅は建築及び器具に用ゐらる。
(三)	文と文との意義を接續するもの	價廉なり、されど質甚だ惡し。

(四七)接續詞の意義上の考察—接續詞を意義の上から考察すれば、(一)同類のものを接續する接續詞、(二)或物に他物を累加する接續詞、(三)前述の事件に對し、後述の事件の順應する接續詞、(四)前述の事件に對し、後述の事件の逆行する接續詞の四種となる。之を例示すれば、

(一)同類の接續

(例) 山又山。海又海。

(二)累加するもの

(例) 花及び月。行くかはた歸るか。

(三)順應するもの

(例) 某は病なり。されば來らず。

(四)逆行するもの。

(例) 彼は一子を失へり。然るに猶勇往奮戰せり。

の如き例を以つて明かである。

(四八)接續詞の成因に依る分類—接續詞は本來の接續詞と、他の品詞から轉成したものとがある。

先づ本來の接續詞から逐次說明すれば、

(一)本來の接續詞

又。且。等。

(二)轉成の接續詞

(イ)名詞からの轉成

故に。間。處。等

(ロ)動詞からの轉成

及び、並びに、さらば。されど。等

(ハ)副詞からの轉成

又は。若しくは。等

である。

(四九)接續詞の分類—接續詞の意義及び其性質等は概説したから、章を終るに當つて、説明の便宜上、接續詞を大別して表示せん。

種類		例
並列累加の意を表すもの		及び。又。且。尚。並に。次いで。而して。それに。それから。等
撰擇の意を表はすもの		又は。或は。若しくは。將。就中。それとも。等
因果的の意を表すもの	(一)順應	かくて。されば。因つて。隨つて。すると。それで。然れば。故に。等
	(二)逆行	併し。但し。されど。しかも。尤も。所が。然るに。さりながら。等

第十章　感動詞

(五〇)感動詞の意義—感動詞とは、人の事物に接して感動した時その意味を表はす單語を謂ふ。

(例)　嗚呼忠臣補氏の墓。

すはや敵ござんなれ。

あら笑止の振舞かな。

右の文例に於て、「嗚呼」「すはや」「あら」は何れも感動の意味を表はした單語であるから、之を感動詞と謂ふ。

一體感動詞は、人の喜怒、愛樂の感情を表現したものであつて、それ自身で獨立して一文をなす事もある。從つて從來感動詞の包含する意義に就いて二説がある。其一は感動詞を廣義的に見て、語句又は文章の上下を問はず、總て感動の意を表はした單語は感動詞なりとするもので、換言すれば、「嗚呼」「すはや」「あら」等の語句、文の上に來るものは勿論、其下に來る「かな」「も」

「や」等をも總て感動詞に包含する說である。其二は狹義的の立場から感動詞を考察して、語句又は文の上首に置かれる「嗚呼」「あはれ」等の單語を感動詞なりと見做し、中間又は語尾に置かれるものは、一括して助詞なりと見るの說である。

此二說に對して寸評と加へれば、理論的立場に立脚して考察する時は、感動詞なる故喜怒愛樂の感動の意を表はしたものは悉く感動詞とも見られるけれ共、「嗚呼」の如く語首に來るものは、獨立して使用され得るが、「かな」の如く語尾に來るものは獨立した生命を有しないで、上の語句、文に依存して其働きを完くするものである。されば感動を表はした點に於ては同じてあるけれ共、文中に於ける役目から考察して、感動詞を狹義的に見て、「嗚呼」の如く語句文の上に來るものの みを感動詞となし、「かな」の如く下に來るものは、感動の意味を含んだ助詞として取扱はれる可きで、從つて今日の文法學者の多くも之に准據して居る。

(五)感動詞の分類——上述感動詞の概念を說述したから、本項に於ては、之れが大要を分類して表示せん。

種類	定義	例
あゝ	物事に感じ喜悲の情を表はすもの	あゝ悲しいかな。
あな		あな口惜しい事やな。
あら		あら甲斐なの奴輩。
あはれ	物事に感じて嘆息する情を表はすもの	あはれ十善の天子。
やや	人を呼掛けるもの	やや何者ぞ。
やよ		やよ正行よく聞け。
いかに		いかに與一。
いで	人を誘ひ、事を思ひ立つ時に發するもの	いで同道せむ。
いざ		いざ目に物見せん。
すは	事の急に起つた時に驚いて發するもの	すは一大事なり。
すはや		すはや空山の雷。
あれ		あれ水鳥のかしましき聲かな。
おや		おや何の音ぞ。
さて〳〵		さて〳〵あきれはてたる事よな。
まあ		之がまあつひのすみかか雪五尺。

第十一章　助動詞（其一）

（五二）助動詞の意義　助動詞とは主として動詞の下に添つて、其動詞の意味を助けるものであり又形容動詞にも附隨して其意味を助ける事もある。猶稀には名詞、代名詞にも附隨し、助詞、他の助動詞に附隨する事もある。

（例）勝ちて驕らず。
櫻花既に開きぬ。
事態明ならず。

右の文例を見るに、「ず」は「驕る」なる動詞に附隨して之を打消す意味を表はし、「ぬ」は「開く」なる動詞に添つて、動作の完了したる換言すれば過去なる事を表はし、最後の「ず」は「明なる」形容動詞に添つて之を打消したものである。「ず」「ぬ」の如く、動詞又は形容動詞の下に添つて、其等の意味を助けたものであるから、之を助動詞と謂ふ。さり乍ら、上述した如く助動詞は只に動詞、形容動詞に留まらず、

（例）父父たり。子子たり。

花吹かば美しからむ。
彼は彼なり。
彼も亦行きつらむ。

右の文例の如くに、「たり」なる助動詞は「父」なる名詞に添つて其意義を助けたもの、「らむ」なる助動詞は「美し」なる形容詞に、「なり」は「彼」なる代名詞に、「つ」なる助動詞は「らむ」なる助動詞に、共に添つて其意味を助けたものである。

（五三）助動詞の重疊　一つの助動詞を附隨せしめたのみで、上に來る用言體言等の意味を充分に助ける事の出來ない時は、他の幾多の助動詞を附隨して、其意味を完全に助けしめる場合がある。

（例）たゞ人口の多きを以つて誇るべからず。
自らは書かせられず、人をして書かしむ。
帝は毫も驚き給はざりしなるべし。

右の文例に於て明ながく、助動詞は一つのみで意義不充分の時は、幾つも重疊する事が出來るものである。

（五四）助動詞の活用　助動詞「しむ」「たし」「む」に就いて見るに、

（1）

1 彼を出でしめば必ず勝たむ。
2 彼を納得せしめ難かるべし。
3 彼をして赴かしむ。
4 彼の技は人をして驚かしむるものあり。
5 彼をして下知せしむれど靜まらず。
6 彼をして下知せしめよ。

（2）

1 書きたくば書かむ。
2 書きたく思へり。
3 文を書きたし。
4 書きたき人は起立すべし。
5 書きたければ書け。

（3）

1 彼は知らむ。
2 知らむ人こそ知れ。
3 知らめばすまじきものを。

右の文例を見るに、助動詞も動詞、形容詞と同じく、語尾變化―換言すれば活用をなすものたる事が明である。

併して上述の文例によつて、助動詞の活用形には（一）の如き動詞と類似の活用をなすものと（二）の如き形容詞と類似の活用をなすものと、（三）の如き助動詞特有の活用をなすものと、大別

して三種となす事が出來る。猶助動詞は類似の活用形を有すとは謂へ、動詞中の下二段活用、良行變格活用、奈行變格活用と同形の活用をなすものとの三種に限つて、全般に亙るものではない。

（五）活用形に依る分類　助動詞の活用形に大別して三種の存する事は前述したから、今次に之が活用形を表示し、其屬する助動詞を說明せむ。

（一）下二段活用の如き活用をなすもの

助動詞名	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形	接續する動詞
る	れ	れ	る	るる	るれ	れ	四段、變格の未然形へ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ	二段・一段・變格の未然形へ
す	せ	せ	す	する	すれ	せ	四段、變格の未然形へ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ	二段、一段、變格の未然形へ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	總ての動詞の未然形へ

つ	て	て	つ	つる	つれ	（て）

總ての動詞の連用形へ

【注意】括弧中の活用は現代文に用ゐられざるもの。以下之に準ず

上表に依つて判明する如く、下二段活用と同形の活用形を有する助動詞は「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」の六語が之に屬する。

猶便宜上此處に一言すべきは、上述の「る」「らる」「さす」の助動詞の口語形であるが、上表は勿論文語の活用であるが、口語になる時は「る」「らる」「す」「さす」は共に文語の下一段活用の如き活用となり、「しむ」は口語では全然用ゐられない。又「つ」は口語では只「て」と謂ふ連用形の一形のみが使はれて居る。

此外口語では「しむ」に代るものとして、別に「せられる」が約つて「される」と謂ふ形となつて、文語の下一段活用の如き活用を爲す特別なものが存する。

（例）行かされ。行かされる。行かされた。

（二）良行變格活用の如き活用をなすもの

助動詞名	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形	接續すべき動詞
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○	總ての動詞の連用形へ
けり	（けら）	（けり）	けり	ける	けれ	○	同上
り	（ら）	（り）	り	る	れ	○	動詞の既然形へ
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	○	動詞の連體形へ

本活用形に屬するものは「たり」「けり」を主とし、別に「なり」「り」が屬する。猶「たり」「けり」の口語に就いて見れば、「けり」は、全然口語には用ゐられず、「たり」は口語に於ては、

（例）たら。たり。た。たれ。

の如き活用をなす。

（三）奈行變格活用の如き活用をなすもの

助動詞名	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形	接續すべき動詞
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	（ぬ）	動詞の連用形へ

本項に屬する助動詞には此『ぬ』一つのみである。併して『ぬ』は文語に於てのみ使はれ、口語には全然使用されない。

（四）形容詞の如き活用をなすもの

助動詞名	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	接續すべき動詞
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	動詞の連用形へ
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	動詞の終止形但良變は連體形へ
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	同上

本項に屬する助動詞は、上表に依つて明な如く『たし』『べし』『まじ』の三語である。

猶一言附加すべきは、文法學者に依つて『如し』を助動詞なりと見る說もあるが、此處には前述の如く、山田及三矢博士の說に從つて『如し』を形容詞に屬せしめた。

口語に於ける上述の助動詞を見るに『べし』は全然口語には用ゐられず『まじ』は口語に轉ずると『まい』となつて此一形のみを存し『たし』は口語では『たい』となつて、上述の口語の形容詞の如き活用をなす。猶口語には別に『ない』『らしい』と謂ふ助動詞が存し、何れも『たい』と並んで口語の形容詞の如き活用をなすものである。

（五）特殊の活用をなすもの

助動詞名	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形	接續すべき動詞
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	動詞の未然形へ
む	○	○	む	む	め	○	同上
き	○	○	き	し	しか	○	動詞の連用形加變、左變は例外
じ	○	○	じ	じ	じ	○	動詞の未然形へ

けむ	○	○	けむ	けめ	○	同上
まし	○	○	まし	ましか	○	動詞の未然形へ
らし	○	○	らし	らし	○	動詞の終止形へ
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○	動詞の終止形へ

特種の活用をなすものは、上表の如く『ず』『む』『き』を主とし、又別に『じ』『けむ』『まし』『らし』『らむ』が之に屬する。特に一言附加すべきは、上述の『き』の活用形『し』『しか』は、加行變格活用に接續する時は、其未然形、連用形に接續するが、『き』は此二形には接續しない。又左行變格活用に於ては、『き』は、其連用形に、『し』『しか』は其未然形に接續する。

終に之等の助動詞の口語形を概説すれば、『き』は口語では全然用ゐられず、『ず』は口語では『ぬ』となり、『む』は『う』又は『よう』となり、『じ』は『まい』、『けむ』は『だらう』、『ましは『む』と同様に『う』又は『よう』となり、『らし』は『らしい』となり、『らむ』は『けむ』と同様に『だらう』と轉する。

第十二章　助　動　詞（其二）

（五六）意義に依る分類　上述した所は、大體助動詞の意義性質及ひ其形式上の分類であつたが本章に於ては主として助動詞の意義を考察し、兼ねて之が文中に於ける役目を述べ、且總括的に分類して説明せん。

（一）受身の助動詞

（例）　犬人に打たる。

博識を以つて世に稱せらる。

右の文例を見るに、『る』『らる』の助動詞の『打つ』『稱す』なる動詞に接して、以つて動作の他から受ける意味を表はして居る。かくの如き場合を受身と稱し、之等の助動詞を受身の助動詞と呼ぶ。併して受身の助動詞としては、上述の『る』『らる』の二語であるが、兩者の意義は全く同一でめる。

『る』『らる』の活用形及之が接續すべき動詞の活用形は略上述したから、今は之等を省略し、之等の活用形の用法を示さむ。

活用形の各稱	る	らる	定義	『る』の例	『らる』の例
未然形	れ	られ	假定の條件を表はす形	問はれば答へむ	射られば死なむ。
連用形	れ	られ	用言に連なる形	問はれたり。	射られたり。
終止形	る	らる	文の終止する形	問はる。	射らる。
連體形	るる	らるる	體言に連なる形	問はる人あり。	射らる人。
既然形	るれ	らるれ	確定の條件を表す形	問はるれば答ふ。	射らるれば死ぬる
命令形	れ	られ	命令を表す形	問はれよ。	射られよ。

猶『られ』の連用形は『切られの事』となつて名詞形として、『る』『らる』の連體形は『打たる人』『育てらる子』の如く文の終止に、既然形は『こそ』の下を結ぶが、之は文章篇『係結び』の章で説明せん。更に『る』『らる』の動詞は受身の働きをなすばかりでなく、(一)能力

の意を表はし(二)自然の勢を表はし(三)尊敬の意を表はす場合に用ゐられる。

(例) 一時間に三里は走らる。

高山も下駄にて登山せらる。

古の文例を見るに『る』は走るに添つて可能なる意を表はし『らる』も之と同樣である。併して可能の意を表はす場合と、受身の場合とはよく注意せねば往々誤る事がある。

受身の助動詞を可能の助動詞に轉用する時は、其六活用形中命令形を除いて、他は悉く使はれ得る。

(例) 筆を取れば物書かる。

去年の事ぞ思出でらるれ。

右の文例を見るに、受身及可能の場合とは全然異り『る』の『書く』の下に添つて、筆を取れば自然的に物が書かれて、其勢の止むべからざるを表はしたものであり、後の例も亦之と同樣である。

くの如き場合を自然の勢を表はすと呼ぶのである。併して此場合も可能の場合と同じく六語形中の命令形を欠いで、他の語形は悉く使用される。

(例) 父上は旅に赴かる。

手づから取出でさせらる。

右の文例を見るに、「る」「らる」は共に受身に非ず、可能に非ず自然の勢に非ず、敬意を表はした場合である。

(二)使役の助動詞

(例) 太郎犬を走らす。

鯉を池に放さす。

弟をして使に行かしむ。

右の文例を見るに「す」「さす」「しむ」は各動詞に附隨して、他をして動作を爲さしむる意味に使はれる。かくの如きを使役といひ、之に屬する「す」「さす」「しむ」の三語を使役の助動詞と呼ぶ。使役の助動詞の活用形及其接續すべき動詞の活用形は前述したが、之等の各活用形も、上述受身の助動詞の活用形に準じて說明するまでもあるまい、以下之等に關しては省略する。

更に使役の助動詞は、敬意を表する場合にも轉用され得る。

(例) 親ら歩ませ給ふ。

天皇陛下東北の野に行幸させ給ふ。

天皇親しく卒業式に臨ましめ給へり。

右の文例を見るに、「せ」「させ」「しめ」は共に使役に非ずして、敬語の意味を表はしたものである。崇敬の意を表す「す」「さす」「しむ」は單獨では用ゐられず、「らる」「給ふ」と結合して用ゐられるのが常である。が、此場合は既に「らる」「給ふ」が敬語なる故、一層丁重なる言表はし方となる。

(三)指定の助動詞

(例) 父は漢學者なり。

君君たり。臣臣たり。

右の文例を見るに、「なり」「たり」なる助動詞の附隨する時は、斷定的又は說明の意味を表はすもので、かゝるものを指定の助動詞と呼び、之に屬するものは上述の二語のみである。

「なり」「たり」の活用形及其接續すべき動詞は前述したが、特に一言すべきは、「なり」は動詞及形容詞の終止形に添つて咏嘆の意を表はす場合がある。

(例) 秋の野に人まつ虫の聲すなり。

右の例文に於ける「なり」は、斷定、說明の意味を表はせるにはあらで、咏嘆的の意味を表は

したものである。

(四)否定の助動詞

(例) 洪水にて渡るを得ず。

何ぞ偉大なる人物の出でざる。

死すともせまじ。

齒芽にもかけまじ。

右の文例を見るに『ず』『じ』『ざる』『まじ』は、各動詞に接して、之を打消す意味を表はすもので、かゝるものを否定(又は打消)の助動詞と謂ふ。

『ず』『じ』『まじ』の活用形、接すべき動詞の活用形も上述せる所『ず』の連用形は他語に接して副詞となり、又文の中止をなし、未然形は名詞となる場合がある。猶古代は『ず』の代りに『に』『な』が否定の助動詞として用ゐられた。

『ざり』は上述の『ず』と動詞『有り』の給合して成立したもので、されば良行變格活用に等しいが、但終止形を欠く。

助動詞名	未然形	連用形	終止形	連體形	既然形	命令形	接續すべき動詞
ざり	さら	さり	○	さる	されば	されば	動詞の未然形へ

古今を通じて五語形が悉く使はれて居るが、但終止形は學者に依つて肯定する說のある事を附加して置く。

『じ』は打消の意味の中へ疑問推量の意を含めたもので、其活用形及び接續すべき動詞は前述の通りである。『まじ』は前述せし所で充分であるから之が說明は省略するが、但『まじく』が音便となつて『まじう』となり、又『有り』と結合して『まじかり』となる場合のある事を附記する。

(五)願望の助動詞

(例) さはいへ戰場に功名を立てたし。

右の文例を見るに、『たし』は動詞に附隨して願望希望の意味を表はせるもので、之を願望の助動詞と謂ふ。

『たし』の活用形及其接續すべき動詞の活用形は上述したから、今此處には省略するが、一言

すべきは、「たく」が音便となつて「たう」となり、又「たく」と「有り」の結合して「たかり」となり「たく」の「た」に接尾語（説述）「げ」及「に」が附隨して「げに」となる場合がある。

第十三章　助動詞（其三）

（六）時の助動詞

一口に時と謂ふも、現在、進行的現在、現在完了、過去、進行的過去、過去完了、未來、進行的未來、未來完了の九種の形が存して居る。今逐次之等に屬する助動詞を簡述せん。

（一）現在に關するもの

現在を表はすには特別の助動詞はない。各動詞の終止形を以つて、總ての場合に使はれて居る。進行的現在とは、或動作の現在進行しつゝある事及び或動作の結果が現存して居る事を示すものである。

（例）花咲けり。

太陽ぱ出でたり。

右の文例を見るに、「り」「たり」は夫々動詞の下に附隨して、共に「咲く」「出ず」なる動作

の進行して居る形を表はしたものである。之を進行的現在といひ、之に屬する助動詞は「り」「たる」の二語である。「り」「たり」の活用形及其接續すべき動詞の活用形に前述したから、今は之を省畧する。

現在完了とは或動作が今終了した事を示すものであつて、之に屬する助動詞には「つ」「ぬ」の二語がある。

（例）彼は本を讀みつ。

彼は字を書きぬ。

右の文例を見るに、助動詞「つ」「ぬ」は各動詞に添つて、「讀む」「書く」の動作の今終了した事を表はしたものである。「つ」「ぬ」の活用形及其接續すべき助詞の活用形は前述したが、一言附加すべきは、「つ」「ぬ」は共に對偶として用ゐられる。

（例）起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さ哉。

浮きぬ沈みぬ搖られける。

（二）過去に關するもの。

動作の過去を表はす助動詞としては、「き」「けり」の二語である。」

（例）かゝる例も屢々ありき。
昔許由といふ人ありけり。

右の文例を見るに、「き」「けり」の附隨して過去の事を表はしたものである。「き」「けり」の活用形及其接續すべき動詞は前述したが、「けり」は往々詩歌等に現はれて、其本來の過去たる觀念を離れて詠嘆の意味に使はれ、「き」は對話に使はれる事がある。

進行的過去に屬する助動詞には、進行を表す助動詞と過去の助動詞の結合した、「りき」「りけり」「たりき」「たりけり」の四種がある。

（例）彼は昔の事を長々と語りき。
彼こそ鎭西一の豪の者なりけり。
後安きものにおぼしたりき。
櫂をあまた立てたりけり。

過去完了は過去の事件の既に終了した事を表はすものであつて、之に屬する動詞には「てき」「そけり」「にき」「にけり」の四語であつて、之等は動詞の連用形に接する。猶此外進行存在

の意を表はす「り」「き」「たりき」も同樣に過去完了を表はすものとして使はれる。

（二）未來に關する。

未來を表はす助動詞には「む」一語がある。

（例）勇往邁進せば何事も成就せむ。

「む」の活用形及接續すべき動詞は前述の通りであるが、「む」は未來を表はす外に、不明なものと推量し、又自分の決心願望を表はすにも用ゐられる。

進行的未來に屬する助動詞は、進行と未來の助動詞の合成した「らむ」「たらむ」の二語であつて、動詞の連用形に接續する。

未來完了に屬する助動詞は「てむ」「なむ」の二語であつて共に動詞の連用形に接續する。猶「なむ」に就いて留意すべきは、助詞の「なむ」がある。兩者の區別は上に來る動詞に依つて識別され得る事は、上述の說明で明かである。

（七）推量の助動詞

推量の意味を表はす助動詞として先「まし」に就いて見るに、

（例）彼も行かまし。

の如く使はれる。此助動詞の活用形及接續すべき動詞は前述した。次に『けむ』は過去の事を推量する場合に用ゐられ『らむ』は之と對し現在の有樣動作を推量する場合に使はれるが、之等の活用形及接續すべき動詞は前述したから之を省略する。終りに說明すべきは『べし』であるが、『べし』の表はす推量は斷定の含まれる强い意味のものである。

(例) 一見して知るを得べし。

『べし』の活用形及接續すべき動詞は前述したが『べし』は古くは音便になつて『べふ』『べう』と使はれた事もある。猶『べし』は推量の意味ばかりでなく、可能、命令、義務を表はす場合にも使はれる。

(例) 三尺の秋水鐵をも斷つべし。(可能の意)

夙く行くべし。(命令の意)

國民は國法に從ふべきものなり。(義務の意)

『べし』の變形として、中古は『べみ』『べら』『べらなり』が用ゐられたが、之等は省略するとして『べかり』に就いて見るに『べし』『有り』の結合して成立したもので、從つて其活用形も良行變格活用と同じであつて『べし』と同義に用ゐられる。

(例) 車內に於て喫煙すべからず。

第十四章 助詞

(五七)助詞の意義 助詞とは或語に附隨して之を助け、以つて他語との關係を明かにするものを謂ふ。

(例) 櫻の花。

雨降らば行惱まむ。

右の文例を見るに『の』『ば』は共に『櫻』及『降る』なる語に附隨して、下に來る『花』『行く』なる語との關係を明かにしたものである。

一體助詞は古くは『テニオハ』と呼ばれ、江戸時代末富士谷成章の大成したものであるが、元來助詞は獨立しては何等の意味のない形式語で、猶語尾變化も有せず、其語形も比較的短い事を其特色とするが、文中に於ける役目は閑却すべからざる重大なものである。

(五八)助詞の重複 助詞は一つのみを以つて意義の不完全な時は、二つ以上重複して用ゐる場合がある。

（例）彼にしてかゝる言ありとは。

皇御國の武夫は如何なる事をか努むべき。

右の文例を見るに、『とは』は助詞『と』及『は』の重複したるもの、『をか』も同樣助詞『を』及『か』の重複して、意味を完全に表はした例である。

（五九）助詞の分類　助詞は便宜上分類されて論ぜられるが、從來は大槻氏の說に依る（一）名詞に附くもの、（二）名詞以外の語に附くもの、（三）動詞に附くものと三大別されたが、此分類法は多少不整頓の憾があるので、此處には山田氏の說に依つて分類を示し、其各々に屬する助詞に就いて說明せん。

- 第一種＝
  - （一）格助詞
  - （二）副助詞
  - （三）接續助詞
- 第二種＝間投助詞
  - （四）係助詞
  - （五）終助詞

（一）格助詞

格助詞とは、句中の成分（後述）の成立に關係をもつ助詞であつて、主として名詞、副詞の下に接續するものである。左に之に屬する助詞を表示して其各々に就いて說明せん。

格助詞	定義	例	口語
が	主格を表す	鳥が鳴く。	が
	修飾語を表す	我が國。梅が枝。	
の	主格を表す	春雨の降る。	の
	修飾語を表す	櫻の花。彼の家。	
を	客語を表す	本を讀む。	を
	動作の行はれ又起きる場所を示す	河を漕行く。國を去る。	
に	客語を表す	櫻花水に浮ぶ。	に
	添加の意を表す	月に叢雲。	
	並列の意を表す	行くに歸るに忘れず。	

へ	客語を表す	彼は國へ歸れり。	へ
	方向を表す	東へ行け。	
と	客語を表す	永水となる。	と
	共同の意を表す	父と旅立つ。	
	比喩の意を表す	櫻花雪と散る。	
	並列の意を表す	夜となく晝となく勵む。	
より から	客語を表す	父は米國より歸れり。	から
	動作の起點を表す	砲聲山谷より起る。	
	比較する標準を表す	父母の恩は海よりも深し	
まで	客語を表す	父は京都まで行けり。	まで
	動作の終局を表す	飽くまで戰へ。	

(十二)副助詞

副助詞とは、上述の格助詞と同じく句中の成分の成立に關係を持つ助詞であつて、句中の成分

たる主格、補語（後述）の下に接續するは勿論、格助詞にも附隨するものである。

副助詞	定義	例	口語
だに すら	一事を示して他を類稱さすを表す	水だに飲めず。	さへ でも
		禽獸すら恩を知る。	
さへ	添加の意を表す	母を失ひまた父さへ失へり	まで さへも
のみ ばかり	これ以外に類例のない意を表はす	逃れし者僅に三人のみ。	ばかり
		只笑ふばかりなり。	

(十三)接續助詞

接續助詞とは、句と句を連續せしめるものであつて、句の成分の成立には何等の關係はない。併して主として動詞に接續するものであつて、譬へば接續詞の如き役目を爲すものである。

接續助詞	定義	例	口語
ば	假定の意を表す	花なくば淋しからん。	ば
	確定の意を表す	水清ければ魚住まず。	
と とも	反對の結果を表す	繪に書くと筆も及ばじ。	て ても
	假定の條件を表す	年を經るとも老いまじ。	
ども	既定の條件を表す	問へど答へず。	けれど けれども
		風吹けども散らず。	
が に を	反對又は意外の意を表す	習ひしが既に忘れたり。	のが のに
		日照るに雨降る。	のに
		雨降るを傘持もたず。	のを

(四)係助詞

係助詞とは、主として述語の上に附隨して、述語の意味及び形に一種の拘束を加へるもので、稀には文の終尾に附隨する事もある。

係助詞	定義	例	口語
は	區別する意を表す	柳は綠、花は紅なり。	は
も	併合する意を表す	太郎も次郎も行く。	も
ぞ なむ	強く指示する意を表す	これぞ牛若丸なる。	ぞ が
		これなむ玉なる。	
こそ	『ぞ』『なん』より一層指示する程度の強き意を表す	これこそ寶なれ。	こそ
や か	疑問又は反語及び『や』は誠に感動の意を表す。猶上に疑問の語『たれ』『幾何』等いの來る時下を『か』『や』で結ぶ事あり	義經なるか。(疑問) 人や有る。(同上) いかでか行くべき。(反語) 豈料らんや。(同上) あな面白の浦の景色や。	か

な	禁止の意を表す	人に語るな。 春な忘れそ。	な
な…そ			

		價幾何なりや。	
		（感動）	

（五）終助詞

終助詞とは文及句の終尾にのみ使はれるものであつて、普通述語の下に附隨して、希望又は命令感動の意味を添へるのである。

終助詞	定義	例	口語
がな	希望の意を表す	雁をさやにも見しが。 訪ひ來む人もがな。	
かな	感嘆の意を表す	玉にもぬける春の柳か。 心細くも思ほゆるかな。	

か し	詠嘆の意を表す	來ても見よかし。 去年の事ぞかし。	
か も	感嘆の意を表す	三笠の山に出でし月かも。	

間投助詞とは體言、用言又は副詞の下に附隨して、文の語勢及び感嘆の意を添へる助詞である。

間投助詞	定義	例	口語
よ	命令又は感嘆の意を表す	早く出でよ。（命令） 壽永の昔かとよ。（感嘆）	よ ろよ
や	詠嘆又は呼掛の意を表す	近江野や鏡の山。（詠嘆） 吾が君や。（呼掛）	
を	感嘆の意を表す	昨日今日とは思はざりしを	のを
し	語氣を強める意を表す	生きとし生ける人。	

此他上述の分類以外に屬する助詞も稀にはあるが、大體以上の分類を以つて助詞に關する說明を終る事とする。

文章篇

以上單語篇に就いて概說したから、次には文章篇の說明に移ることゝするが、こゝには簡單に要領のみを述べる事とする。此點は豫め讀者の諒恕を請ふ次第である。

第一章　文の成分

(一)主語・述語　文又は文章の意義に就いては、總論に於て既述した所であるが、一體文を組立てるには、主として體言を上に置き、下に用言を置いて說明せしめるものであつて、他の助動詞・助詞・副詞・接續詞・感動詞等は唯之等を補助するのみである。併して文の上にあつて說明せられる體言を主語と稱し、主語に對して之を說明する用言を述語と謂ひ、此二者は文の組立には必要欠くべからざる根本要素である。

(例)　犬走る。
　　空曇る。

右の文例に於て、「犬」「空」等は主語であつて、「走る」「曇る」等は述語である。

(二)主語の構成　前述した主語は如何なる語から成立するかを見るに、

(イ)一般は體言、又は之に助詞の伴ふもの、

(例)　花咲く。
　　鳥が啼く。

(ロ)用言の連體形、又は之に「こと」「もの」「ところ」等の連續するもの、

(例)　過ぎたるは及ばざるが如し。
　　行くこと速かなり
　　去るものは疎し。

(ハ)主語の重複

(例)　國語・歷史・漢文・地理は最も得意なり。

(ニ)部分の主語

（例）　兎は耳長し。

部分の主語とは、主語の構成中の特別のものであつて、右の例を見るに、「兎は」主語・「長し」は之が述語であるが、然るに「耳」なる語は「兎」なる主語の何の點を述語が說明したかを明確にする爲に附加された語であり、而も主語の性質を有して居るので、此くの如きものを部分の主語と謂ふのである。

（三）述語の構成　述語は如何なる語から成立するかを見るに、

（イ）一般は用言であり、

（例）　本を讀む。

（ロ）體言に助詞「ぞ」「か」の伴ふもの、

（例）　彼は何人ぞ。

（ハ）述語が「なり」「たり」の指定動詞なる時は、上の語と結合して一つの述語となり

（例）　廣瀨中佐は軍神たり。

（二）述語の重複

（例）　子供は走り且飛べり。

の如くである。

（四）補語　一體前述の如く、文は主語・述語の二要素を以つてすれば、先づ完全なりと謂ふべきだが、乍併、時に複雜なる思想を言表さんとすれば、此二要素のみでは完全でない場合がある。

例へば、

（例）　菅公（筑紫に）配流さる

なる文例を見るに、主語・述語は完全に具はれるも、猶此用言のみでは完全なる思想を表はせりとは謂へず、「筑紫に」なる語を補つて初めて其意味を完全ならしめるのである。斯の如く、用言の意義の不完全なるを補はん爲に附加せらるゝ語を、之を補語と謂ふ。

（四）補語の構成、一體補語は如何なる語から成立するかを見るに、

（イ）　一般に體言に「を」「に」「と」「をして」等を伴ふもの、

（例）　日本軍露國軍を破れり。

秀吉關白となる。

（ロ）用言の連體形、又は之に「こと」「もの」「ところ」を伴ふもの

（例）　我は足るを知る。

彼は足ることを知れり。

(ハ)補語の重複

人をも身をもうらみざらまし。

の如くである。

(五)修飾語

(例) 冷き雨一日中降れり。

花美しく咲けり。

右の文例を見るに、「冷き」なる語は主語「雨」を修飾し、「美しく」は述語「咲けり」を修飾して居る。斯の如く文中の語を形容し修飾する語を、之を修飾語と謂ふ。併して更に仔細に之を見るに、「冷き」なる修飾語は主語を、「美しく」なる修飾語は「咲けり」を形容修飾して居る事は前述の如くであるが、之に依つて修飾語は(イ)體言を修飾するもの、(ロ)用言を修飾するものの二種が存する事が明瞭である。

(六)修飾語の構成　體言の修飾語は、

(イ)用言の連體形より成り、

(例) 滔々たる濁水は遂に堤防を崩壞せり。

(ロ)體言に「が」「の」「より」の伴ふもの、

(例) 彼が父は學者なり。

用言に對する修飾語は、

(イ)副詞より成り

(例) 風絶えず吹き捲れり。

(ロ)用言に助動詞「て」及び助詞「に」「と」「ばかり」「まで」「だけ」等の伴ふもの、

(例) 敵將愧ぢて自盡せり。

(ハ)修飾語の重複

(例) 白く美しき花廣き庭園に咲けり。

(七)主部・述部・補部　文の主語と之に屬する修飾語とを主部、補語と之が修飾語を補部、述語と之が修飾語を述部と謂ふ。

第二章　文の成分の位置及省略

(八)文の或分の排列　上述した文の成分には一定の排列の順序がある。

(一)主語は文首にある。

(例)　花咲き鳥唱ふ。

(二)述語は文尾にある。

(例)　風吹き、雨降れり。

(三)補語は述語の上、主語の下にある。

(例)　篤行世に著る。

(四)修飾語は被修飾語の上にある。

(例)　爛漫たる櫻花は棚曳く霞の如し。

(九)文の成分の倒置　文の成分の排置には一定の順序が存すると謂つたが、乍併、詩歌、美文等には、之等の排列の倒置する場合が尠くない。

(例)　行け正行。(主語と述語の倒置)

降る雪に道は埋れり。(主語と補語との轉倒)

祝へ人々君ケ代を。(述語と補語との轉倒)

月も上りぬほの〳〵と。(修飾語と被修飾語との倒置)

(10)文の成分の省略　一體文の成分は漫に之を加除する時は、全然文意を害ふものであつて、注意すべき事ではあるが、さは謂へ文を簡潔雄勁ならしめん爲には、時に其一成分を省略する場合もある。

(例)(人々)柵内に入るべからず。(主語の省略)

一寸の蟲にも五分の魂がある。(述語の省略)

他日必ず(君に)謝すべし。(補語の省略)

第三章　句

(一)句の意義『句』は別に『節』とも呼ばれるが、例へば、

(例)　花散る。

なる文例を見るに、主語と述語を具備した一箇獨立した完全な文であるが、然るに之が

(例)　花の散るは、宛も蝶の舞ふに似たり。

の如く用ひられる時には、從來の一箇獨立した文たる位置を失つて、他の文の一部分に過ぎない

ことなる。斯の如く、一箇の文が其獨立性を失つて、他の文の一部分となつたものを「句」又「節」と謂ふ。

(三)句の種類　併して上述の句は、便宜上次の五種に分類される。

(イ)名詞句(名詞節)名詞句とは、名詞の如く用ゐられる句であつて、

(例)　民の飢餓に泣くは、惡政に因る。

(ロ)說明句(說明節)述語の如く用ゐられるもの。

(例)　大阪は工業殷盛なり。

(ハ)形容句(修飾節)修飾語の如く用ひられるもの。

(例)　月の明なる夜赤壁に浮ぶ。

(ニ)副詞句(副詞節)副詞の如く用ゐられるもの。

(例)　雪降れば木毎に花ぞ咲きにける。

(ホ)對立句(對立節)各句が相互に對等の地位に立つもの。

(例)　滿は損を招き、謙は益を受く。

第四章　文の構成上の分類及性質上の分類

(一)文の構成上の分類　上述した文は、之を其構成上から觀察する時は、便宜上次の如く四種類に分類する。

(イ)單文　單文とは其文中に句を全然含まない文の謂ひである。

(例)　二兎を逐ふ者は一兎をも得ず。

社會は善惡正邪の戰場なり。

(ロ)複文　複文とは單文に反して、其文中に句を含む文の謂ひであつて、

(例)　富は家を潤し、德は身を潤す。

君子は人の己を知らざるを憂へず。

(ハ)重文　重文とは前述した對立句を含む文の謂ひであつて、

(例)　柳は綠にして、花は紅なり。

花咲き、鳥啼く。

(ニ)混文　混文とは、前述の三者、換言すれば單文、複文、重文の混合した文の謂ひであつて、

（例）支那は面積廣く、人口も亦多し。

（四）文の性質上の分類　文は之を其性質上から考察する時は、便宜上之を左の四種に分類する。

（イ）說明文　說明文は又叙述文とも呼ばれ、事物をありのまゝに說明をなす文の謂ひであつて世上一般に用ゐられる文は之である。

（例）楠氏父子は忠義の龜鑑たり。

（ロ）疑問文　疑問文とは疑問の意を表し、又は發問をなす文の謂ひであつて、

（例）雲か山か呉か越か。

（ハ）命令文　命令文とは命令又は希求・禁止の意味を表した文の謂ひであつて、

（例）此堤防に登るべからず。

人の惡を言ふことなかれ。

（ニ）感動文　感動文とは感動・詠嘆の意味を表した文の謂ひであつて、

（例）あな面白の浦の景色や。

以上簡單乍ら之を以つて文章篇を終る事とする。如上の概說の外二三述ぶべき事柄もあるが、大體簡潔ながら國文法の要點は大略說明したつもりである。

——（了）——

昭和四年四月十日印刷
昭和四年四月十日發行

定價四拾錢

國民叢書
—（61）—
國文法の知識

著作者　東京市牛込區新小川町二丁目四番地　小林馨
發行者　東京市牛込區東五軒町三十番地　八
印刷者　下平敬一

〔文藝社印刷部印刷〕

發行所　東京市牛込區新小川町二丁目四番地（振替東京二一一〇二番）　文藝社

不許複製

國民叢書

◇小林鶯里著◇　四六判美裝・定價各四十錢（分賣）各冊百餘頁・送料各四錢（隨意）

文部省認定――名溪會推薦の國家的良書！

國民常識の源泉！　知識の實庫！　家庭の必備書！

◇本叢書に對する讀賣新聞の批評

何も文部省が認定したから東京高師の名溪會讀物調査部が採擇したから推薦すべき良書だといふのではない。全く民衆大學の快絶な講座であり、國民常識の淵源であるから、さういふのである。實に普通で、通俗で、明確で、こゝろよい理解が、有ゆる專門學科に亘つて面白く與へられる。まづこの叢書さへ充分に熟讀すれば、大學や中學へ通學の出來ないことを苦にするにも及ぶまい。本叢書が續々と刊行せられることは、たしかにわが國民文化の一大慶事である。『國民叢書』の名空しからずと云はればならぬ。

國民叢書

小林鶯里著　四六判百餘頁各冊讀切　定價各四拾錢　送料各四錢

第一編	新しき修養	固苦しき修養より脱して知らず識らず身を修めんとし、人の履むべき道を叙べたもの。
第二編	宗教早わかり	世界の宗教中より十大宗教を選び、教祖、教義および現在の狀態を述べたもの。
第三編	立志より成功への近道	早くものにならんとする人のため社會のあらゆる方面に亘つて立志より成功への近道を説明したもの。
第四編	國民としての常識	國民として必ず知らればならぬ事を選んで、解説を施したので、必ず一讀すべきもの。
第五編	新聞を讀む基礎の知識	新聞を讀まざる者は一人もない、然るに基礎の知識なくしては解する事の出來ない事がある。本書はその基礎を説明したもの。
第六編	經濟學の知識	經濟學の根本的原理を知らせ、併せて經濟全般を極めて通俗的に叙述したもの。
第七編	日常科學の話	吾人日常の科學現象を詳述し、科學知識の普及を圖らんとしたもの。
第八編	偉人の修養	偉人英雄の裏面に隠れたる修養を選擇し面白く叙述したもの。

東京市小川町二ノ四　牛込區　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁 各冊讀切　小林鶯里著　定價各四拾錢 送料各四錢

第九編	**哲學早わかり** 哲學は難解のものとする弊を補ふために平易に誰にも解るやうに述べたもの。
第十編	**新しき年中行事** 我國の風俗國民精神の表れともいふべき年中行事を叮嚀に解説したもの。
第十編	**藝術の話** 藝術は人類に取つてなくてはならぬものである。本書は藝術全般に亘つて平易な解説を試みたもの。
第十編	**思想善導** 思想善導の急務であることは多言を要しない。本書は平易にその目的を果さんとしたもの。
第十編	**文化生活の基調** 文化生活の何ものたるも辨へないものは上調子に流れようとする。本書はその基調を解し易く叙べたもの。
第十編	**青年の進むべき道** 國家の中堅とも云ふべき青年が如何なる方面に進むべきかを述べたもの。
第十編	**論理學早わかり** 本書の如く平易に述ぶれば論理學も決して難解のものでない、誰にもわかる。
第十編	**野球の話** 初めて野球をやる人のため、若くは野球を見る人のために解り易く興味深く述べたもの。

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁 各冊讀切　小林鶯里著　定價各四拾錢 送料各四錢

第十編	**斯の如き人は成功する** 古來の成功者中から成功すべき性質を抽象して述べたもの、成功者の編書。
第十編	**心理學の話** 心理學を平易に而も通俗的に叙述して國民一般に心理を了解させやうとしたもの。
第十編	**婦人の進むべき道** 婦人問題のやかましい折柄、婦人の進むべき道を明かにすることは何よりも大切である。本書は其れを説明したもの。
第二編	**理想の家庭** 有らゆる方面より考察して理想的家庭を建設する指導をなすもの。
第廿編	**教育學の話** 今日では教育は教育者のみに委すべきときではない寧ろ一般人の心得べきものである、其れを詳述したもの。
第廿編	**倫理學の話** 人倫の道に就てその概要を述べたもの、新時代に生きる者の心得べき大切なる事柄である。
第廿編	**平凡道徳** 道は近きにあり、本書は平凡なものゝ中に眞理を認め吾々の行くべき道を示したもの。
第廿編	**精神修養** 吾々の修養は敎多あるが、先づ第一に精神の修養をはからなくてはならない。

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一〇二番

郵便はがき

郵便切手
壹錢五厘
貼用

東京市牛込區新小川町二丁目四番地

文藝社調査部行

國民叢書

定價各四拾錢
送料各四錢

小林鶯里著

四六判百餘頁
各冊讀切

第廿五編	向上發展の基礎	吾々は向上し發展することが唯一の目的でなくてはならない。本書は向上發展の基礎を述べたもの。
第廿六編	佛陀の福音	釋迦の經典の中の最も大切なものを抄錄したもので、日々の修養に好適である。
第廿七編	基督の福音	キリストの言葉は新舊約全書にあるゝその中から代表的のものを選んだもの。
第廿八編	無線電話早わかり	最近無線電話の進歩は著しいものである本書は極めて平明に圖を多く入れて說明したもの。
第廿九編	無線電話の知識	無線電話に關するあらゆる方面の質疑に應答し、無線電話に關する凡てを明かにしたもの。
第三十編	世界の格言と警句	世界の格言と警句との中から精選してその粹を集めたもの。
第一編冊	家庭科學の話	日常吾々の遭遇する自然現象の中でも家庭生活に最も密接な常識的科學を說いたもの。
第二編冊	普通選擧の話	普通選擧法實施の今日國民たるものは何人も心得てゐなくてはならない。本書は平易に解釋してあるから誰にも解る。

東京市牛込區新小川町二ノ四
文藝社
振替口座東京二一一〇二番

323
36

國民叢書

小林鶯里著

定價 各四錢
送料 各四錢

四六判百餘頁
各部切賦

第三編	政黨早わかり
第四編	貯金のすゝめ
第五編	音樂の知識
第六編	公民としての心得
第七編	成人教育の話
第八編	農村發展の基礎
第九編	日本地理の話
第十編	全國名所めぐり

一國の政治は政黨を度外視して考へる事は出來ない、本書は政黨に關する一般を述べたもの。

生活の安定は總ての根本である。本書は貯金に關する道を詳しく說いて一家の安全策を指導したもの。

音樂は最近著しい發展を示して來た。本書は音樂一般の知識を述べたもの。

公民教育の必要は現下一般の風潮である本書は材料の選擇に十分の注意を拂つて公民の心得を述べたもの。

成人として缺くことの出來ない事項を平易に且つ明快に述べたもの國民として知らねばならぬ事柄である。

農村の發展は國家の發展の因をなすものである。本書は根本的の問題をとらへ農村發展の基礎を述べたもの。

自分の國の地理を知らぬは自分の家を知らぬも同樣である。本書は日本地理の粹を拔いたもの。

わが國に名所は多い。本書は全國の名所を美文的に表はせるもの、座乍らに旅行氣分が溢る。

東京市小川町牛込區
新二ノ四
文藝社
振替口座東京
慶二〇一一番

愛讀者カード

（雜誌で御認めにならぬやう楷書で御願致します）

No.

御住所	
氏名	
書名	
此書籍をお求めになつた書店名	

まことに御手數ですが上記の各欄へ御住所、御氏名及この「カード」挿入の書名を御記入の上切手（壹錢五厘）貼用御投函下さいます樣御願いたします。このカードに依り弊社は新刊書の御通知や、其の他の通信をいたし永く永く御交情を保ちたいと存じます。

文藝社（「國民叢書」出版元）（雜誌「文藝」發行元）

國民叢書

四六判百餘頁 各冊一圓 切讓

小林鶯里著

定價各四拾錢 送料各四錢

第十編 四一 **萬有科學の知識**
二十世紀は實に科學の世界である。本書は、あらゆる方面から科學現象に通俗的な説明を加へたもの。

第十編 四二 **自然科學の進化**
人類と密接な關係をもつ、自然界に於ける色々の現象の進化する有樣を述べたもので、新人の必讀すべきもの。

第十編 四三 **科學萬能の世界**
今日の世界に於て、いかに科學が力となつてゐるかを探り、解説を施したもの。

第十編 四四 **宇宙の秘密**
科學は進歩しても、宇宙にはなほ不可思議なる事柄が多い。本書は宇宙の秘密をさぐつたもの。

第十編 四五 **陸軍の知識**
軍人に關すること、即ち帝國陸軍の總てを述べつくして遺感ない。壯丁者の必讀書。

第十編 四六 **日本歴史の知識**
日本歴史の要點を集めて一冊とせるものいかに要を得てゐるかは識者の認むるところ。

第十編 四七 **東洋歴史の知識**
日本歴史の姉妹篇。百餘頁にまとめた所に本書の特色がある。

第十編 四八 **西洋歴史の知識**
前二書の姉妹篇である。歐米諸國の興亡を悉く小册子にまとめたもの。

東京市牛込區新小川町二ノ四 文藝社 振替口座東京二一〇二番

◇小林鶯里隨筆集

四六判函入 布裝美本

定價 壹圓五拾錢 送料八錢

讀賣新聞は且て著者を千手觀音と評した。これは何を意味するか？著者の精力主義なることは世間周知の事である。

著者の精力と博識との結晶は即ち本書！

◇報知新聞評　別に題目を定めず思ひ付いた儘に閑談漫語をなすのが隨筆であるが、それに拘束せらるゝ所がなくて、書く人にも、讀む人にも快適の感を與ふるものである。本書は筆を執つては鬼神の如き鶯里氏の隨筆で、社會の各方面の事項に對し、或は考證的に、或は研究的に、或は諷刺的に、或は文藝的に、或は趣味的に、それ〳〵筆を馳せたものである。如何にもスッキリとした味ひのある文章である。

脊文字、扉文字、卷頭語には著者肉筆をそのまま表はしたるも趣きがある。

東京市牛込區新小川町二ノ四 文藝社 振替口座東京二一〇二番

◇讀者の文藝を主とせる◇

月刊 文藝 雜誌

〔毎月一日發行 ● 定價貳拾五錢 ● 送料一錢〕

本誌の標語

◇埋木となるべき運命の作品を世に紹介して美しく花を咲かせようとするのです。

◇あく迄讀者の雜誌として、誌上を讀者に開放し自由な文藝の花園を作らうとするのです。

◇讀者の作品は絶對に尊重して必ずこれを掲載することに努めてゐます。

◇定價はなるべく安くして、一人でも多く同好の士を得て、共々により高き藝術を作成しようとするのです。

◎文藝趣味の鼓吹　◎純粹文藝の宣揚！

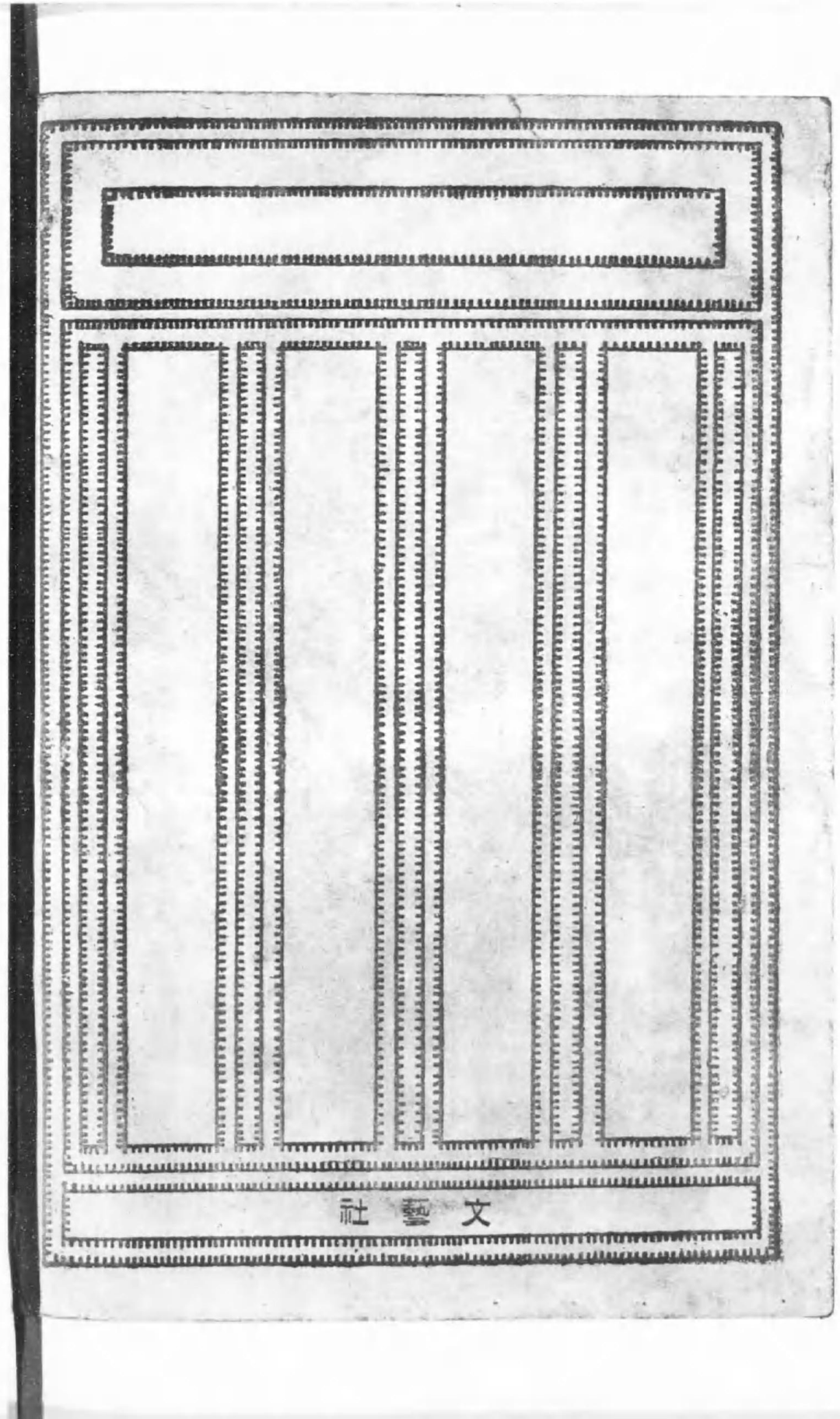
◇毎號懸賞募集〔毎月十五日締切〕

種目

○散文（抒情文・叙景文・叙事文）○感想
○短文　○詩　○童謡　○短歌　○俳句
○短篇小説　○戯曲一幕物　○好きな文章　○讀後の感想　○批評と感想　○讀者の面影　○讀者通信
○其他

◎文藝愛好家唯一の投稿機關雜誌。

◎文藝に趣味を持たる士は是非一本を——。

東京市淀川區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

終